

第 2 回  
大岡信さん お誕生月の催し

つなげるし ⇄ つながるし

ことばリレー記録集

ことばのたね実行委員会編

第2回  
大岡信さん お誕生月の催し

# つなげるし⇄つながるし

ことばリレー記録集

ことばのたね実行委員会編

主催：三島市・三島市教育委員会

受託者：ことばのたね実行委員会

協力：三島ゆうすい会・てんとうむし文庫・三島絵本をたのしむ会

はじめに

二月は三島市出身の詩人・大岡信の誕生月です（一九三二年二月十六日生）。ことばのたね実行委員会では、二〇一九年度より三島市の委託を受け、生誕月を機会に大岡信の仕事を伝える催しを企画しました。

第一回目は、『丘のうなじ 大岡信詩集』の出版社・童話屋の代表者であり編集者の田中和雄さんにご講演いただきました。会場参加者との詩作の時間も盛り込まれ、大岡信が大切にしていた言葉の面白さや奥深さにふれる実に楽しい場となりました。

第二回目となる今年度。新型コロナウイルスの影響により、人々が集まって語り合うことが難しい状況の中、私達は、大岡信が実践していた「連詩」を試みることに。それが今年度の企画にふさわしいのではないかと考えずにはいられませんでした。これまでごくごく当たり前だった大切なことができなくなってしまった今、言葉によって人と人とのつながっていく「連詩」に、閉塞状況の中でも心を通わせられるヒントがあると思っただけです。

「連詩」は、複数人が集まり、同じ場所と時間を共有して詩を作り合うものですが、現況にあわせて、インターネットを使って行う方法を考えました。そして、手探り状態で実施にこぎつけたのが「ことばリレー」です。なにぶん初めての試みで不安も抱えた企画でしたが、要となる最初の一連目（発詩）を快く引き受けてくださった谷川俊太郎さんの言葉に、背中を力強く押ししていただきました。そして、有難い

ことに多くの方々に興味をもって参加してくださいました。（三島市民一五六名  
三島市以外六十八名 合計二二四名）。

二〇二二年二月二十三日には、皆様にご参集いただき作品披露を予定しておりましたが、コロナウィルス感染拡大の影響を受けて、やむなく中止といたしました。その代替として、当初より作成する予定であった記録集を、作品だけでなく、参加者の感想を掲載する等、より充実した内容にして配布させていただくことにいたしました。それが本書です。

「ことばリレー」というひとつの試みが、参加者のみなさんにとってどのような体験となったのか、そして、その体験から生まれた言葉たちが語りかけてくることを、手にとって感じていただけましたら幸いです。

なお、本記録集は参加者への配布の他、三島市立図書館および中郷分館への備え付け、三島市HP上での公開、希望者への限定配布がされましたことを、書き添えておきます。

末尾になりますが、やわらかで清々しいスタートをきって、「ことばリレー」の船出を送り出してくださいました谷川俊太郎さんのお力添えに感謝申し上げます。また、ゲスト参加を引き受けてくださったチームカナヨ、インカレポエトリの皆さん、慣れない段取りの中、あたたかくメールのやりとりをしてくださった参加者のみなさん、関係各位に心より御礼申し上げます。

二〇二二年二月 ことばのたね実行委員会

【凡例】

・本書は、「第2回 大岡信さんお誕生月の催しへつなげるしゅつな  
がるしゅ」の事前取り組みとして実施した「ことばリレー」において、  
参加者が制作した作品記録集である。

【制作期間：2020年12月1日（火）～12月31日（木）】

・ことばリレー<sup>®</sup>は電子メールやLINE（ライン）で行われたため、  
そのやりとりや、ほとんどの完成作品の表記は横書きであったが、  
本書の編集にあたり書籍としての読みやすさを考慮して、縦書き  
表記とした。その際、数字やアルファベットについては原則、原文表  
記のまま全角文字の場合は縦書きで、半角文字の場合は縦に横書  
きで表記した（二桁までの数字は除く）。また、全角と半角が混用  
されていたスペースについては、全角スペースに統一した。詩が一行に  
収まらない場合は、次行にまたがる際一字下げにて表記した。

目次

はじめに	2
あたらしいなまえ	6
ありうべき旅	8
あるくことば	10
いちばんほし	12
一陽来復	14
彩りシンフォニー	16
生まれ落ちる	18
海から街へ	20
笑顔の世界へ心について考えよう	22
おとなから子どもへ 子どもからおとなへ	24
カーテンをあける	26
かさね、かさねていく	28
変わりゆく世界	30
ことのはのねいろ	32
転がるビー玉、光を散らす	34
自然と人々	36
水平線のむこう	38
すまいる	40

生命	42
そして二人はつむがれる	44
たからさがし	46
小さくて大きな僕の一日	48
宙返りのかぞく	50
灯	52
ぬくもり	54
ぬくもりのバトン	56
光の種	58
風景	60
ふじさん わらう	62
マントルのまばたき	64
リフレイン	66
ことばリレーによせて	68
谷川俊太郎	
連詩について	12
「ことばリレー」とは？	11
ことばリレー参加者一覧	2

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 まぶしいビー玉をくちの中で転がして  
やわらかなミルクに微熱の額を埋める  
甘い唾液でつぼみは開いた

かのん

2 たとえばきみが、あさに産声をあげたとして  
それならぼくは、よる生まれだとおもうんだ  
暗闇をいつているからといって、なにを調子にのつていたんだろうね  
そんなことない、なんてこと、きみはぜったい言わないで  
勝手にぼくの、かみさまでいて

いまり

6 水の大陸がみえる  
それはどこまでも続いていくようで  
結局は、きみの口の端から垂れ流されていた  
そして潜る、潜水する  
ぶくぶくと泡が立ち上り、きみはまた死んで生まれる

いまり

3 世界は、ほんものでなくてはいけなから  
捨てられた卵白と、紙で切った薬指の血、いつか乾く風呂場の水滴  
全部きちんと額縁に入れた

渚

7 ここは、息が、しやすい  
サメも海鼠も巻き込んで、踊っていたら  
ぶつかつた鋭利な親知らず

渚

4 みえない時に会える人  
だまったままの裸の目  
わたしは歳をとったけど  
誰にもついていけないで  
あなたの目だけを見つめてる

平岡花

8 時計の針ちくたく  
オーロラの香りがするね  
林を抜けたらガラスが割れる  
ひかりのリボンが垂れてくる  
微睡のソナタ 誰かが呼んでいる

平岡花

9 深爪の親指が霜柱しゃくしゃく踏みしめ  
慌てて掬うふたつの手のひら  
乱反射をたべるわたしは幼い

かのん

13 くまの子のように身震いすると  
なずながさぎめいて新しい名前を呼んだ  
「つつぶしたのまだつめたいつち」

かのん

10 もうすぐお別れね、と祝杯があがる  
やわらかな乳房に、青が血走る  
あなたの下腹部  
月を食べたように  
ぼんやり、ひかっている

いまり

14 落ちる、もしくは浮上する  
はじめてぼくの現在地を這う  
からだは泥にまみれているのに  
唯一、目玉だけが無垢だった  
なにかにがい、くちの中の砂利を吐き出す

いまり

11 体重がチョコレートのようにほどけていつて  
ビルの上に黒い粒だけが残る  
きょうは、愛が降らないの

渚

15 真空中のマスクして導火線に火点けて  
吹っ飛ばした らりるれろが弾けていった 子宮が動く音しかなかった  
世の中ペットボトルの蓋集めても動くわけなくて、

渚

12 かじかむ手のひらにまなざしをたくわえて  
外で人を待つ  
氷の影ゆらめいて悲しみの全てを超えてきた  
時空の彼方から音が響くと  
物事は形ではなくなっている

平岡花

16 ひろい空が見える  
中にいること感じてる  
瓦礫に埋もれ眠る日も  
夢を見ることがある  
今日わたしたちはやさしい言葉を持っている

平岡花

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 くだいてゆく  
ねむりからさめぬまま  
たびをつづけるいしたちを

ピメリコ

2 こうしてここで  
そらのおくをみていると  
どこかにあの日のじぶんがいるようで  
わたしをのせて自転車をこぐひとの背中が  
しずかにゆれている

ひと

6 いちにちの始まり  
すいしうやまへ  
ちいさな手のひらにおきにいりを一つ  
だんろの上に 昨日をつなぐ  
たしかに見えるひかりのつぶ

Sampo

3 そらにのぼる  
おしろよりもたかく  
ひろいひろいところに

玲

7 くしゃみをした電話の先で  
やさしく笑うひと  
みりんを変えたら きんぴらが美味しくなった

童

4 腕をのぼす うけとめたくて 指の先まで  
ふりそそぐ霧雨  
しみていく  
僕の皮膚を 土の中を  
いつかの誰かの記憶とともに

童

8 いわまからしずくがぼたり  
かわのはじまりとしろいいき  
あかいうしがかおをだす  
せなかにはこびとがさんになん  
こくようせきをかかえている

玲

9 天井をみあげたら目が合った  
まるいリズム くりかえす波  
うとうと うつらうつら

Sampo

13 しかたがないのでひとやすみ  
きんぴらごぼうのおにぎりひとつ  
なつかしいおもいで

玲

10 すぐのかわいたおとがきこえる  
しだいにささやきごえにかわった  
いこくのことばだろう  
カーテンをあけたらとりのおっぼが  
にしよぞらにすいこまれていった

ピメリコ

14 突然の雷鳴に僕たちは走った  
どこまでも  
つないだ手  
握りしめていた小石は  
やがて朝陽にかわった

ひと

11 ここはどこだろう  
みたこともないぼしよだ  
いままでかんじたこともないきもちにぼくたちは

ひと

15 たくさんのすきまからひかりがとびはねてはきえる  
それはおんがく  
それはかいらく

ピメリコ

12 入ってみたのにでていた  
でてみたのに入っていた  
すすんでいるけどすすんでいない  
とんでもぐって もぐってとんで  
あいいろが深く こんべいとうはおくだ

Sampo

16 波動は等しくとどくのだろうか  
目覚めた息子のりんとした瞳に  
息をのむ朝  
カンナを打つ木槌の音がひびいた  
ほら、あそこ、ここにも

童

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 洗いたてのふるさとのシワを伸ばした  
アイロンのコードの先とつながった  
猫のしっぽも縞模様。  
蝉のふりしたアコーディオンが  
夏のつもりで鳴いています

こうじ

3 三つ編み上手にできた朝、足取り軽く ホームへ向かう  
行き交う人の顔さえも、笑顔に溢れる登下校。  
高鳴る鼓動は止まらない ひかりのしめす方向へ

ゆうこ

4 花は咲く  
なぜか 青とピンクの洋服を  
はずかしい  
やっぱりはずかしい でもあそぶ  
花は咲く 凜と咲く

ふみえ

9 おとこのこも かわってく  
ぐんぐん ぐんぐん せものびて  
ひとりは 巣から 飛び立った

N

10 ふたりとも  
戻ってくるとは言うけれど  
きつと何かになるだろう  
便りを海につなげると  
近所で静かにかがやいた

孔一

11 ふるさとの空にかがやく  
土と木の星。ちかづいた。  
百年まえの約束

こうじ

12 ひやくねんまえは じゅうごさいだった わたしのおばあちゃん  
まだおじいちゃんと であうまえ  
そうして けっこんしたのは はたち  
あのせんそうを くぐりぬけてきたおばあちゃんは  
よぞらのほしをみあげて なにを つぶやいたの

N

5 根も伸びる 光を受けて彼方へと  
鳥の道の下を  
クジラの道の下を

孔一

6 もぐらの親子は遊んだよ  
広がる根の中  
行ったり来たり  
そうして穴から出たならば  
どんな景色が見えたらう

N

7 着物をじょうずに着れたあと  
七五三に出かけたよ  
じょうずにできたよ

ふみえ

8 目にうつるもの かがやいて  
秋の陽射しで わらってる  
幼な子から 少女へ  
ぐんぐん ぐんぐん かわってる  
光の中を あるいてく

ゆうこ

13 ありのまま 人は佇む  
ただそれだけで  
輝くよ

ゆうこ

14 ことばのたねから芽が生えて  
小さな森で遊ぶ5人  
過去も未来も現在も、  
すべてはことばで  
できている

こうじ

15 さんぜのことばをすべておさめた蔵の宮。  
よぞらをはしるてつどうの  
しゅうちゃくえきはきつとそこ。

孔一

16 谷川俊太郎さんが蒔いた種  
きつと育つと  
ことばをうむ  
その種は新しい町につながる  
ことばには芽がある

ふみえ

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 鏡餅みたいなそのお腹  
鏡開きまでに  
割れるといいね

T

2 森には日が上り  
山の木々は青々と茂り  
豊かな心深めつつ  
手と手を結び輪を広げ  
自然を全身で感じる

なっちゃんあああん

6 割れたお腹を眺めながら  
割った鏡餅で作ったお雑煮を食べ  
新年の新たな風を全身に受け  
この世の全てに感謝をし  
今年一年頑張るぞ

P.N. かず

3 そよそよと吹く風  
木々のあいだをすり抜けて  
こどもの頬をくすぐる

のこ

7 あとどのくらい  
歳を越すのが楽しいか  
いつまでも楽しんでいたいお年頃

ちはを

4 よく伸びる  
子供の頬は  
お餅みたい  
僕のお腹は  
かがみもち

ちはを

8 冬の寒空  
家を飛び出して  
いつまでも話が尽きない  
あの頃に  
大人になるなんて考えもしなかった

のこ

9 寒さで強ばる手に季節を感じ  
口から出る白い吐息に  
あの頃を思い出す

P.N. かず

13 それぞれの夢に向かって走りだし  
どんなに遠くに離れても  
またこの星の下に集まれる

のこ

10 肩を並べて焚き火を囲もう  
思い出話に火を灯そう  
きつといつでも  
あの頃に  
夜空を眺めながら

T

14 見ている景色が違っても  
離れ離れになっても  
きつと忘れない  
1番大切なものは  
いつも必ずそばにある

なっちゃんあああん

11 空には綺麗な満月  
星たちが輝き  
静かな時間が流れる

なっちゃんあああん

15 見たい景色を思い描く  
心が弾む方へ行こう  
夜明け前の白んだ空

T

12 永遠のような時間の中で  
信じよう  
僕たちもあの星のように  
きつとどこかで  
輝けるよ

P.N. かず

16 過去に花を咲かせ  
今に種をまき  
芽が出ることを願って  
願うのならば未来を見たい  
一度きりの後戻りのない日常を

ちはを

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 この青に何が潜んでいるのか  
知ってか知らずか 空を横切る昼の使者は忘れ花を咲かせ  
倒景は山の頬に紅を差し 表情を与えた  
美恵子

2 ぼちゃりと踏み込んだその重みは  
地球のふところをくすぐっている  
閑散とした目抜通りにわき出る人  
転がる大根すべるみかんまるまっていく時計草  
ブラウンシユガーはハートルートの左です

ほなみ

6 グリーンフラッシュは現れない  
どこかにしがみついてはいないかと  
散ってしまった波長を探す  
立ち上がりスカートに砂粒を払う  
幸せは訪れない この混沌  
真紀

3 宇宙のある惑星の研究者達が  
地球人の顔から  
鼻と口が消えたと報じた

みつ子

7 空っぽの鳥かごを手にさまよう二人  
探している幸せは毛布にくるまって  
どこまで歩くのか冷たい霧の森を

緑

4 建物の窓に 空が映る  
たくさんの窓に たくさんの澄んだ空  
羽ばたいて見えなくなる鳥の群れ  
高架道路の上にも 広がっている空  
風が吹いている ガラスに映る雲のない空

緑

8 微かな風が吹き  
生い茂る木々が左右に割れ開くと  
白い空洞路が現れた  
それは林立したビル街の通りに似ていた  
霧が二人を誘うように流れる 奥へ奥へと  
みつ子

9 旅先で覚えた味は大都市の記憶  
いまだ離れた恋人を想い見つめ酔う  
今夜のブルームーン

真紀

13 娘よ、なにをさがしさまようか  
からっぽのかごにいれるもの  
霧のむこうにあるはずのもの  
みつ子

10 ハンドル握った海岸線 開けた窓には Mangata  
藍色の凧を漂いて明日を照らした道標  
あなたは覚えているだろうか  
今宵307年ぶりに密を許された木星土星のランデヴー  
袖子の黄もいで 一陽来復

美恵子

14 切り口は三角にも四角にも丸にも当てはまる  
要するにあなた方が想う如何様な形にも変化します  
サルオガセの仙人が滑らかに語るのだけ  
キツネの嫁入りに使ったオシロイが見えてしまった  
イカサマだあと叫んで、囲まれた白い目  
ほなみ

11 仮の居場所は深海の幻想  
浮き上がろうとする魂と落ちていくだけの岩のかけら  
風見鶏は自ら軸を抜き取り歩きはじめた

ほなみ

15 開けてしまったバンドラの  
仮面の下はジキルかハイドか  
闇雲に伸びず手の先に触れたいものはただひとつ  
美恵子

12 迷子の旅人は夜を待つ  
頭上には無数の道しるべ  
腹に火の玉を抱えた女を探す  
いいえ私はからっぽなの あの子は？  
青いドレスの娘を指差した

真紀

16 毛布にくるまって手紙を書く  
冬の灯りはまぶしくて冷たい  
心は煮出された紙のようにどろどろして  
日のひかりに乾かそう  
そこに言葉をつづれるように  
緑

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 あさひがさして心の窓をあけはなし  
おはよう おはよう おはよう  
いつもの朝に いつもの家族のことば  
焼き立てパンの香りただようリビングで  
微笑み交わし今日がはじまる

知恵子

3 そらのいろ かぜのおと つちのにおい  
よどみない きよらかなみずのながれ  
ふわりとまるい ネコのあくび

若菜

4 穏やかなひざしを かんじながら  
草原にねころび のびをする  
ネコのあくびに あわせるように  
まあるい こえで はなうたうたう  
はなうた聴いて ネコは ふんわり ジャンプする

寛子

9 東の空へ流れる雲に  
西の空から叫んでる  
真つ赤な夕陽 あーした天気になあれ

知恵子

10 あしたはなにが まっている  
ゆうやけぐもに きいてみる  
きつと きつと いいことあるよ  
まっさらな あたらしいいちにち  
だいすきなあの子に おはようっていつてみよう

真理

11 おはよう おはよう  
白い息に温かな気持ち伝わる  
また一歩ふみだす 新しい自分

磨里

12 ころころ くるくる かわる日々  
おひさま えがおで すすんでいく  
うたい わらい おどる  
てくてく てくてく あるいている  
つないだこの手と ぬくもりと

寛子

5 ねこねこ ねこは あくびをひとつ  
ねこねこ どんなゆめをみる  
おひさま ふんわりつつんでる

真理

6 優しくなでる潮風に  
ふるさとの母 想う旅ねこ  
泳ぎも得意になったから  
鰯を土産に帰ろうか  
あの子と一緒に帰ろうか

綾子

7 やわらかな笑顔を思い出す  
あたたかな気持ちが溢れ出し  
私のしつぽは空を向く

保子

8 しつぽを向けた空のなか  
あわぶくぶくぶく浮かんてる  
あれはこないだ お空にいった  
赤い金魚の泡だるか  
流れる雲に金魚を想う

磨里

13 空の宝石達のうた  
深く静かな癒しのわらい  
愛ある命 未来をおどる

綾子

14 長すぎる夜にも 彼方から星がひかり  
強すぎる嵐も きつと凧が訪れる  
果てしなく深い森にも どこかに泉が湧き  
どこまでも深い海の底では さかなたちは自ら光る  
胸の奥に灯そう ちいさなひかり

若菜

15 あたたかく灯るひかりに心安らぎ  
新たな道に希望を照らす  
共に歩む小さな一歩に彩を添える

保子

16 どんな歩みも一歩から  
さあ ふみだそう 新たな道へ  
空を仰ぎ 風を感じ 温もりを纏う  
宝石のようなことばを散りばめた宝箱胸に抱き  
あなたの 私の未来に夢を紡ぐ

知恵子

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 かげぼうしが付いてくる  
子供のころの自分みたいに  
砂利道にうずくまって こつちを見ている  
橋の上を二両の列車が走ってゆく  
枝に柚子がなっている

緑

3 同じ色の帽子をかぶった小さな姿が  
爪先で氷をつついていて  
遠い昔の私をくりかえすかのよう

多嘉子

4 晴れ渡る空に目眩がして  
街のまん中で立ち止まると  
通り過ぎる顔 顔 顔に  
青くにぐる呼吸が重なって  
逃げ場のない抽象絵画を描き出す

裕晃

9 潜ったつもりがいつのまにか耽溺  
助成を求めて特異点への投擲  
「ここにいる」こと知ってもらえればそれだけで上出来

大和

10 きつっといういいことあったから  
言葉のかけらも泡に変わって  
プカプカ浮いていくでしょう。  
朝日と夕日の時間差を  
山にその分かれてやる

るーこ

11 夏に見つけた形のきれいな石  
石英が混じっているよと十五歳の鉱物鑑定士が教えてくれた  
ひろったのは一昨年（おとし）の長雨のあとの午後

緑

12 降り注いだきらめきの残滓は悪戯に残酷  
思わず漱（くちこそ）ぎこぼれまいとしたそこから  
いつか流れ着くのは還るべき海なのでしょうか  
いつかまっさらになれるのでしょうか  
いつかいつかを待ち望んだこの身が清らかなになる日は来るので  
しょうか

大和

5 昨日の雪のように重なる日を  
まっすぐに突き刺すのは  
あのえんぴつの線だろうか

るーこ

6 はつきりと くつきりと  
それでいてあいまい  
あ、呑まれる きつと  
なんて幸先の良い邂逅  
ためらいの先は「はじめまして」

大和

7 日記に大きく丸を書いた  
服を着替えて布団に潜り込む  
なんともいえない浮遊感

裕晃

8 かばんを抱えて 揺られていく  
見つけた知らない一人と 握手した  
足と足の間 風は吹き流れて 街をかき回す  
笑い怒り悲しみ喜ぶ渦を横目に  
北極鯨は胸びれを振るった

多嘉子

13 百年、千年、一万年、もっと長く  
あちこちを旅してきた破片たち  
雨は流れて地面にしるしが刻まれる

多嘉子

14 ゆりの花の折り紙を折って  
三歳の子にあげた  
彼女はそれを持って戸のかがげにかくれて  
それから「ありがとう」とはつきり言った  
顔を出して笑って走っていった

緑

15 たどたどしいピアノの音がカーテンを揺らして  
時は旅に出て戻ってこなかった  
インドのサドウが今日救われたんです

るーこ

16 過ぎし影は捻れ 跳ね 沈み  
取り返しがつかないほどに形を変え  
細やかな波となって打ち寄せる  
新しいカレンダーに予定を書き込む  
私はもうすぐ母になります

裕晃

1 ただどししいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 深い深いふるさとの海に  
ことばはきらきらと波をたてる  
あたたかな日の光を反射して  
誰かがなつかしくふるさとを想うとき  
ことばはまっしろな泡沫になる

美伶

3 忘却へ忘却へ  
ながそうとする波にぐんとあらがって  
ここであまれた

美緒

4 それは決意  
それは恋心  
はあとの神社の鐘をならし  
竹林をのぼってくだって  
またいのるのです

いしだ

5 合わせた手のひらからこぼれ落ちたのは  
黄色い歓声と憧れ  
私は徐々に天使から人間になっていく

さえ

6 さよなら私  
さよならまぶしい記憶たち  
私を天使だと言った母はもういない  
羽根をもがれた人間たちは  
それでも前をむいて歩くのです

美伶

7 気づくと海は遠くにある  
私は地面をひたすら歩く  
少しづつたしかな足取りで もうこどもではなくなつて

美緒

8 純粹で潤った目はけがれていく  
それを人は経験といたりもするが  
時間はあるのにお金がないお子さん  
お金はあるのに時間がないジジババ  
人間は、行ったりきたりのシーソーゲーム

いしだ

9 見上げるために深く沈んだ  
板のささくれが指を刺した  
お腹が空いたので砂を噛んだ

さえ

10 どこへ行っても何をしても  
恩は仇として返される  
昨日の友は今日の敵  
理不尽だなんてなげいても  
ひとつ涙がおちるだけ

美伶

11 みぜらぶるといふ言葉をひろった  
思いだしそうに消えていくもの  
すうっとひく なみのように

美緒

12 パンが無ければケーキを食べればいいじゃない  
民を愛していた聖人君子のはずが  
認められずにギロチン処刑  
残ったのは水っぽいパン  
宮殿宮殿焼肉のたれ

いしだ

14 今日も街には雪が降る  
ベタベタとして灰色の  
排ガスマみれの雪だるま  
サヨナラみなさんまた明日  
にっこり笑って会いましょう

美伶

15 明日になる前 はざまの溝に  
足つつかけてべちゃりと転ぶ  
おだやかでまっさらな呼吸音

美緒

16 ずりむけた膝から  
ふきのとうが生えてくる  
バターにまみれたアスパラベーコンが  
食べられる、食べられると喜んだ男は  
オフィスに向かって駆け出して行った

いしだ

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 おはよう！  
また朝が来た  
太陽がにこにこ笑っている  
今日は何ができるかな？  
明日は何ができるかな？

ツキ

3 今この世界でだれかが笑っている  
笑っている人がたくさんいると  
笑顔の輪が広がっていく

はな

4 「わははー」「あははー！」  
私が笑えばみんなも笑う  
みんなが笑えば　私も笑う  
いつまでもどこまでも  
この笑顔の輪よ！広がっていけ！

ベル

9 言葉は話すものだったり　書いたり　読んだり　聞いたり  
いろいろなことに使うもの  
言葉って何だろう

ころばしやz

10 思いを伝えるものだろう  
では  
思いとはなんなのか  
思いとは

エジソン

11 思いは自分たった一人が知っていてこの世にたった一つしかない  
思いがあるから言葉がうまれる  
言葉があるから思いを伝えられる　全てみんなの大事なもの

時雨

12 おだやかな駿河湾  
今見ている海は広くておだやかだけど  
世界の海はどんなにあっていいことだろう  
ゴミがちらかっていたり  
世界には想像もしない海が広がっているだろう

みんなのアイドル♡

5 笑えるのは動物の中でも人間だけ  
だから笑わないと損、損  
昔、だれかがそういった

ヤマボン

6 挑戦しないと損するだけ  
挑戦したらそんなるか、しないか  
二分の一の確率だから  
いろんなことにも  
挑戦しよう！

なし

7 一つ一つの言葉  
朝日のようなあたたかさ　海のような心の広さで  
たくさんの話　聞いていく

suzu

8 心について考えた  
優しい心  
悲しい心  
いろいろある  
心って何だろう

毛のはえた卵

13 アメリカの海　イギリスの海　きれいなようで　きたなかったり  
そんなかくされたよれをみつけて  
みんながきれいにしてくれる

白ねこ

14 みんなの心　温かい心  
どんなものも温かくしてくれる  
世界には　どんな人がいるのだろう  
知らない世界　新しい世界  
きつと想像のできない世界ばかりだろう

海湯

15 温かい心を持った人もいれば冷たい心を持った人もいる  
温かい心を持った人がいなければ  
世界はどのようになってしまいうだろう？

Brown Kun

16 温かい心を持っていない人がたくさんいても世界は変わらない  
それぐらい世界は大きい  
今まだ知らない大きな世界  
でも知ることだってできる　どんなにあらいい海だって  
どんなにきたなくても　大陸は海でつながっているから  
ゴールデンカムイ

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 書きとめておきたいことはたくさん。  
たとえば、生まれてはじめてサイダーを飲んだときの子どもの顔。  
逃げていったトカゲのしっぽのブルー。  
健太郎

2 「おはよう！」  
今日は人生で一番新しい日  
まっさらな自分に、まっさらなことばに  
さあ、出会っておいで  
「いつてらっじゃい！」

スギヤマカナヨ

6 まっさらノート明日はなにをかこうかな。  
たまには絵だけじゃなく、文もかいてみたいな。  
かんさつ日記、ものがたり、  
ふしぎなお話、こわいお話、  
考えるのは楽しいな。  
ふじの

3 「いつてきますー！」  
僕のまっさらノート  
うめてきます！

ハル

7 かがやく黒い子どもの瞳  
考えごとをすると、赤い舌がのぞくの  
かわいいね

かおり

4 僕のまっさらノート  
今日は何を描こうか  
空の色、出会ったことは  
僕の心を動かすもの  
全部描き留めよう

ソラ

8 ほんとう？  
わたしもみたいな  
あかいした  
ねえねえおかあさん  
こっちみてかんがえて

あおい

9 そんなにじつと見られたら  
考えごとはむずかしい  
あたまの中が、あなたでいっぱい

麻央

13 2LDKはおもちゃのうみ  
「かたづけようか」「かたづけようね」  
そのなかを赤子がすすむバターフライで

いつか

10 新しいページをひらいて  
あなたの名前を書きつらねた  
ひらがなみつつを、くりかえし、くりかえし書くうちに  
じぶんの気持ちが見えてくる  
どんどん どんどん あふれてくる

志津

14 あれも これも  
かたづかないまま年の暮れ  
初めてのこといっぱいあったし、まあいいか  
ひっくりかえったおもちゃ箱  
赤子の気持ちでリスタート

まきこ

11 多くの気持ちはどんなだろう  
あそぶこと、友だちのこと、家のこと…  
まだまだページはたくさんあるぞ

新

15 ころのうみでクルクルクルおもちゃばこがひっくりかえる  
あしたのころのなみうちぎわに  
あなたのことばがやってくる

ゆきこ

12 そうだねえ。  
でんき！ひきだし！てーぶる！えんぴつ！ひと！きもち！  
あかちゃん！あかり！  
まどがらす！くれよん！しゃわー！ひも！おんがく！おにんぎょう！  
ちぎゅうぎ！  
かみのけ！ほっぺ！おだんご！きゅーつ！とうふーさらだ！  
にくーほね！  
いただきますー！ごちそうさまー！

いり

16 おいでおいで ここへとおいで  
ここはあなたのかえる場所  
ともしびかかげた子ども達 楽器鳴らした子ども達  
さんざめきながらやってくる  
ふくらんだポケットの中身は あふれんばかりのノートの束  
おすみ

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらうっている

俊

5 転びそうになったとき  
どこかの世界で  
転んだかもしれないと考える

か

2 なにかが思いうかぶ  
それはやさしいことば  
勇気をもらった  
海の音  
なんでもできるかもしれない

竹

6 ヒジとカカトがくつついて  
やあやあとあいさつしたが  
またいつかとすぐはなれて  
つきあったときわすれないよう  
おたがい名前を言い合った

だ

3 剥がれたカサブタは  
二度とわたしのもとには戻らないでしょう  
いつかはわたしだったもの

マ

7 明日の僕は昨日の僕と出会わない  
明日の僕が出会うのは  
今日まで続く僕物語

こ

4 切り株からひこばえが生える  
煮豆と納豆菌がであった  
いらぬものと  
ぐうぜんで  
いるものが生まれる

こ

8 全速力で駆け出した背中を  
後ろからつかまれて「おかえり」  
壁の中と外はどちらかしか見えない  
飛ぶ？ 破る？ 掘る？  
いつそ忘れてしまおうか

マ

9 うっかり重さを忘れたら  
壁を上へと歩いていった  
空はオムライスのような赤

だ

13 細胞は3ヶ月でみんな生まれ変わるんだって  
夢のゴミ箱に置いていこう  
昨日が燃える気配で目覚める

マ

10 黒いあんこに白いわた菓子  
こんべいとうもたべようか？  
ふわふわの夜  
手をつないで見上げた  
ススキの顔も笑ってる

か

14 どんな日になるか楽しみだ  
むかしの自分に  
どんなことが起こるか教えたい  
これで失敗しなくなるかは  
わからない

竹

11 みんなこのようになってほしい  
世界がどう変わるか誰にもわからない  
でも未来の自分ならわかるかもしれない

竹

15 あっちの道を進んでたら？  
それは誰にもわからない  
行ったことがないからね

か

12 明日が明日来るとして  
明後日が明後日きて  
そろそろ今日が終わりそう  
もう今が終わって  
未来がすぐ目の前にやってきているので楽しみ

だ

16 あのと悩んだ道  
あのと悔やんだ道  
どちらも  
自分の選んだ道  
自分に意味を託す道

こ

かさね、かさねていく

1 ただどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 子どもの時に見た水平線はいつもここにある  
なつかしくゆるぎない  
一本の線

すわまきこ

2 繰り返す波  
優しい気持ち  
悲しい気持ち  
初めて聴いたわが子のことば  
光る水面をじっとみつめる

すまきまき

6 砂浜で逆立ちをする  
さつきと同じ一本線  
でも  
ちっちゃい僕が  
でっかい地球を持ち上げる

ゆみこば

3 オーシャンドラムって手作りできるらしい  
とググった息子は、100均の材料で挑戦中  
真剣な 長い睫毛の 伏し目

童

7 群青色、紫、橙色  
山の向こうから  
朝がうまれる

早

4 目をとじる  
遠い波音  
潮のかおり  
海につつまれ  
手足を伸ばす

早

8 そつとカーテンを開けて  
水滴、流れ落ちる  
ストープのヤカンのかすかな金属音  
半跏思惟像の手つきでまだ眠る人の寝息  
今日のはじまりのうた

童

9 白い息とこぐベダル  
刻むリズムは春へと向かう  
赤いマフラーなびかせて

ゆみこば

13 娘に買った子ども百科事典  
を 熱心にひらく妻  
「知らないことだらけなの」と笑う

童

10 ぐんぐんとすすむときがあれば  
ふと迷い止まるときもある  
たとえある時、うずくまってしまったとしても  
リズムカルに打つ心臓の鼓動はまだ止まらない  
ずっと昔からこの地球にあったように

すわまきこ

14 今年をあらわす漢字  
子どもたちの元気な声  
いまの流行りのことば  
近くでお茶を飲みたいな  
あたりまえはあたりまえじゃない

すまきまき

11 窓をあける  
あたらしい朝に深呼吸  
ピオラと目が合う

すまきまき

15 いつか思い出すために  
今日を生きるわけじゃないけど  
新しい意味は不意に降りてきたりもする

すわまきこ

12 夏 庭のすみっこで見つけた  
秋 花壇に植えかえた  
冬 やつと名前がわかったよ  
ユキノシタ  
春になつたら花が咲く

ゆみこば

16 タブレットを開くとつながることば  
一つのことばから広がっていく  
思いがけない所へつれて行ってくれる  
そして  
ことばの引き出しに新しいことばを重ねていく

早

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 うみはいまどんなきもちだろう  
ほほえむはのひたいにあさひがさしてとは  
どんないみだとおもいますか  
このふたつがわかるのだとすれば  
ふるさとしかないのではないでしょうか

時雨 いつも心は虹色に

3 ふるさとはなんでもしっている  
ほほえむはのひたいをみて  
ふるさともわらっている

ナマケモノ

4 ふるさとは言葉で言い表せない大切な場所  
ほほえむ母のふるさとも一つしかない  
1人1人のふるさとはこの世に一つ  
生まれたときにあたえられ、生涯失われることがなく  
かけがえのない大切なふるさと

夜月美麗

9 かげになびく山  
まっかにそめられたはっぱ  
うえをみれば そらまっかになっている

ONCE

10 純粹な子供の言葉  
言葉が生み出すイマジナリーな世界  
伝えたいけれど 伝えられない  
子供にしかできない世界  
理解できるたった二人

時雨 世界

11 人によって違うイマジナリーな世界  
わかる人だけ理解できる  
想像の世界

さくらんぼ

12 人 それは他の動物となにか違うものを持っている  
人生という荷物を背負いながら  
何かを求めている  
求めているものが見つかる  
人はどうなってしまうのだろうか

リーベン

5 1人1人のふるさと  
この世にたった一つのふるさと  
大切なふるさととは今も生まれている

秋

6 あさひはやさしくて  
ちからづよい光を  
はっして  
こどもたちを  
元気づけるよ

みな

7 あさひがしずみはじめて  
ゆっくりときこえる  
こどもやしぜんのかえ

ヴァーディア

8 わがやにかえるものたち  
せいじやくな よるの まちにのこるは  
いえの こぼれび  
いつか そらをみれば  
あるは 無数の星々

餌草輩乱歩

13 人生  
人が生きる  
世界

春を告げる

14 人が歩む世界は  
ただ一本の道だけではそれは人生とはいえない  
人生にはいろんな道がある  
世界の広さはことばでは表せない  
人の心はどんなものにもたとえられないくらいの価値がある

こゆんぬ

15 世界  
季節  
季節は……

結実

16 今ぼくがいるところは  
さむい季節でも  
世界のどこかでは  
とてもあつい季節  
だからぼくと世界のどこかの人が考えていることはちがうのかもな

クラゲ

ことのはのねいろ

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 しずくとしずくが手をつなぎ 木かげで子ぐまが口ずさむ  
ぼっちゃあ ぼっちゃあ あらららら  
た・の・し・い・な

くさ

2 ちいよ  
ごんご  
ぼちゃあぼちゃ  
ひいまんま  
やあやん

わた

6 とおくできこえる かみなりの音  
思わずつかんだ ちちのシャツ  
あたまをなでる おおきな手  
子ぐまのそばにも よりそうかけ  
ならんでうみを見つめてる

かぜ

3 ゆっくりあるいて おおきくジャンプ  
すなが足をくすぐるよ うちやくちやうちやあ  
手からおひさまのにおいがする

すず

7 おおきなくろくも さつたころ  
シャツからはなれたちいさなて  
そらをゆびさし ほほえんだ

よし

4 あめがおでこに  
ぼつとり ぼつとり  
やがて ざんざか  
つきからつきへと ざんざか ざんざか  
あめがわたしをつつみこむ

よし

8 そらにかかるは なないろのはし  
きれいね きれいね  
またたくたびに ひとみから  
キラキラあふれる たくさんのいろ  
とまと みかん バナナにキュウリ あととはなにな

すず

9 あおいいろは ソーダ水  
あわのように えがおはじける  
あはは うふふ えへへ

かぜ

13 白いせつけん モコモコモコ  
あのね きょうね おにわでね  
しゃぼんといっしょに おはなしの旅へ

すず

10 おにわでゆれてる つやつやのナス  
水玉がナスのうえで ころころわらう  
あかねいろの空の中  
いちばん星が かがやいた  
おうちの中から はなをくすぐるいいにおい

くさ

14 桃太郎とロケットのつて宇宙旅行  
うしろの席にはアリスとアリババ  
ブレーメン星では音楽会をきいて  
おいしいおかゆをたいらげた  
いま、ヒュー、ストーンと地球にもどってきたところ

わた

11 赤いにんじん、ごろごろじゃがいも、涙のたまねぎ  
ちからみなぎる肉と、かずかずのスパイス  
こんやはカレーだよ

わた

15 宇宙旅行のおみやげ なあに  
おつきさまにおしえてもらった歌と  
天の川の ピカピカひかる水

くさ

12 外は はく息 白くなり  
へやは ゆげで くもります  
みんなでたべる たのしいごはん  
ほかほか ほかほか  
おいしいね

かぜ

16 おなかも ころも ぼつかほか  
あたたかいもうふにくるまつて  
たのしかったね うんうんうん  
だんだんまぶたが なかよくなつて  
あらあら こんどはゆめのたび

よし

転がるビー玉、光を散らす

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひさがして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 うなじのもつとうしろのほうでは  
正しいリズムのきゅうりが刻まれる  
たゆたうということを知らないからいつも  
頭のとっぺんがかゆく  
カーテンにしみた葉のかげをじっくりとなぞる

麻湖

3 夢だということに気付きたくなかった。  
こどものころわたしの頭を撫でた母はもういない。  
ママ、起きるのが怖いよう。こどものわたしが言った。 彩夏

4 ゆさぶられゆるりゆれている夕方の夜  
ぐらんぐわん高田馬場ロータリーがななめ回転し足が崩れる  
右足にかかった全体重90kgを回転にそって親指に集中させて  
ぐぐぐ、ぐ、ぐ、  
ピタリ止まった。

動き続けている駅前が俺により気絶、く。

けいたろう

5 肉体から遠のいた意識は  
視力を喪ってからみえる白色の先にあつて  
ゆらりゆらりと手をふっている

雨季

6 半分くらい、死んでいたのだ。  
止まった電車、人の波。吹き返した意識。  
呼吸以外の機能がない産業廃棄物の溜まり場で、  
胃の中身を全て吐き出した深夜、  
ガードレールに落書きされた憂鬱の文字を見つけた。

彩夏

7 へそと子宮の間あたりをさすって立ち上がると  
指をさされたから顔が黄色いのだとわかる  
早く飛行機に乗らなければいけない

麻湖

8 とおくへいって  
それから  
履いていた靴をうらがえす  
さざまれた溝から流れ出るしずくが  
あつまって川になる

雨季

9 バナナ  
バナバナ  
バナバナバナ  
けいたろう

10 甘い幻覚  
空想都市  
入り口はあるけれど出口はない  
逃げて  
盲目の魔女に見つからないように

彩夏

11 見下ろすと  
身を投げている  
おとこのすがた  
雨季

12 あれは美しい星ですね  
いや、窓です  
雀がないている  
今日は風が気持ちいいな  
雨が降っています

麻湖

14 バルコニーでちょうど同じ高さの恐竜と  
目が合いそれ以外なくなる  
そうだスーパーに行くのだった  
手すりの砂埃が白い毛にうつつて  
風呂に入っても消えない

麻湖

15 かつて切り身と呼ばれていた姿で泳ぐ魚を海から拾い上げる夕暮れ  
図鑑に載っている本来の魚の姿をみたことがない  
みんなしんでいるのかもね

彩夏

16 それから、  
ほんもの  
を探してもぐる  
肩にのった重みを払って  
とおく揺らいだひかりをあおぐ

雨季

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 朝日が  
のぼって  
気持ちがいいです

遥也

2 あさはきもちがよい  
だつてまぶしいほど明るくて  
人間でもあらわせない  
美しい太陽が

トマト

6 澄んだ空気とやわらかい日の光が心地良い朝  
昨日までの出来事と今日からの出来事に  
思いをめぐらせる  
今日はどんな一日になるかな  
ふと聞こえた小鳥の鳴き声が返事をしたように聞こえて  
するめ

3 ひるはぼかぼか温かい  
あさがすぎて太陽が  
きれいにでてるから

美音

7 ひかる海にはたくさんのか  
わいとおさかなたちが仲良  
く  
およいでる…きれいだな…

シャル

4 夕方みんな帰るとき  
太陽もだんだん沈んでく  
空がオレンジ色でカラスがなく  
みんなとも今日はおわかれだ  
次の日みんなと会えるかな

B. I. Sans

8 あさひをうけてひかる海は  
まるでたくさん宝石がかがやくように  
きれいなもので海の中までとどいて  
いる  
それはあなたの顔をてらしている  
あなたの顔を笑顔にしている

いちごじゃむ

9 おさかな きれいだな  
星も きれいだな  
とてもきれいだな！

かんたろうたんこぶ

13 ふるさとはすこしわがしい  
あさひはげんきにわらつて  
みんなみんなうつくしい

ありけむ名言集

10 星が  
夜空に  
輝いている  
宝石みたい  
だな…

さと

14 ふるさとのあさは  
やさしく  
むじやきなこどもは  
たのしそうに  
わらっている

MEI

11 ふと上を見れば  
夜空が  
広がっている  
無数の星は  
自然のイルミネーション

秋刀魚

15 こどもってじゆうだな  
たかいたいようのしたで  
しずかにすやすやねむっている

鈴田 まいな

12 自然とは  
自分で守るもの  
自分とは  
自分で作るもの  
今日もどこかで自分が生まれてる

リトルデーモン

16 ぼくらは  
ねむっている  
大人も子供もみんな  
目覚める朝は  
くるのかな

RORY

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 思い出すのは あついなつの日  
足もとを流れる砂に  
水平線までつづくうねりに  
おどろきとまどい

どこかに連れ去られるような心許なさを覚えたあのなつの日

佐和

3 あのなつの日は  
あの子のひたいにもあさひがさして  
うみはおだやかにあのこをあらっている

たー

4 かあさんあときはなぜほほえんでいたの  
あのとぎの海は  
あのとぎの波は  
いまもぼくの心の中に  
ふるさととなってあらわれる

osa

5 君はなつの日のことずつとおぼえてくれるかな  
あの海が あの波が  
君のころにあらわれてくれるかな

K

6 かなしみが押し寄せ心流されてしまう午後  
足もとを掬う砂  
アスファルトの向こうに見える陽炎が  
あの日のなみのようで ははのてのようで  
僕は前を向く

美和

7 流れる砂に確かなあしあとをつけて  
見えない水平線を目指して  
僕は歩く

佐和

8 水平線の向こうに何があるの  
ひとつひとつのあしあとが  
君の生きていくあかしであるかのように  
君が君であるためのことばであるように  
しっかりとそしてしっかりと残されていく

たー

9 やわらかな ひかりをうけて  
おだやかな つきかげにてらされて  
波にあらわれる

osa

10 時がたち波があしあとあらっても  
今日という日が流されてしまっても  
ほほえむははのかおをわすれなかつたように  
つよくうつくしく  
かがやいてあらわれる

K

11 穏やかな月に照らされて、荒い波に身を任せ  
辿りついたのは  
あの夏の日 ははとのおもいで

美和

12 ふるさとの海は  
ははのほほ笑みのようにおだやかで  
心許ない僕の足もとも  
ふりかえれば たしかなあしあとを残している  
水平線は遠い

佐和

13 水平線は遠くとも  
そこには孤独しかなくとも  
君は旅してゆかなくてはならない

たー

14 太陽はまたのぼり  
月が見えない夜もある  
ふと目を凝らしてみようと  
遠くに見えるのは  
微かに灯る灯台のひかり

osa

15 ひとは悩み苦しみまちがえるいきものだ  
微かに灯るひかりのように  
ふたしかなものをさがすたびこそ人生だ

K

16 辿りついたのは水平線のむこう  
ぼくのうしろから朝日がさして  
母の額を照らしていて  
ぼくはまっさらなこどもになって  
うみはおだやかにおかえりとわらっている

美和

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 ことばはいろいろ  
人もおなじでたくさん  
性格もたくさん  
花もいっぱいある  
まるで人の一生は多年草みたい

SS&SSのSSZS

3 ことばはたくさん  
やさしいことば おもしろいことば ひとをきずつけることば  
かなしいことばより やさしいことばで えがおのわをつくろう

はっぱ

4 えがおのつくりかた  
わかりません  
ひとはそれぞれえがおがちがう  
ひとそれぞれにえがおのつくりかたがある  
そのつくりかたはじぶんだけがしっている

夜ぎつね

5 たしかに笑顔は自分だけしかつくれない わからない  
笑顔って楽しいから笑う 面白いから笑う うれしいときも笑顔  
笑顔って自分にとってさいこうなんだよね だからつらくても  
悲しくてもずっと笑顔 笑顔は大切

乙女2号

6 なつかしいふるさとかえる  
ひさびさにみた子どものえがお  
いつもとちがって大人びていた  
ひさびさに会って  
自分の中で何かが変わった

べちか

7 えがおは人を幸せにさせる  
たとえ地球がなくなっても  
えがおは消えないと思う

おおかみ

8 えがおが人を幸せにさせるなら  
自分も幸せになる  
幸せってどういうこと？  
うーん  
幸せってどういうこと？

めり

9 幸せとはなにげない日々を生きること  
毎日自分が生きたいように  
生きること

Amia

10 生きることとは自由にすごすこと  
何事にもとらわれず  
自分のやりたいことをやること  
逆境にもまげず  
自分を信じること

ぴあ

11 生きることとはとても辛い  
だけどそれを乗り越えたその先に  
幸せをみつけると 私は思う

乙女1号

12 はのからだにふれてみる  
ほんのりあたたかいふるさとのように  
うみのおとがきこえてきて  
ことりのなくこえもきこえ  
なつかしいゆめをみる

キャタピルのメガ進化

14 なつのあさひ  
まぶしいかぎりのひのひかり  
このふるさただけの  
ぜっけいのけしきがみえました  
あのうみとともに

べんきち

15 あのうみは  
ずっとぼくらを  
みつめてる

114514

16 みつめている  
あらゆるほうこうから  
わたしたちのおもいもしないところから  
かんしきされている  
かんりきされている

第七感に目覚めた男

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている 俊

2 まっさらな子どものことばをきいて  
いえのなかはしぜんとかかるくなる  
たいようのひかりがいえのなかにはいり  
そのかぞくをみまもっている  
そしてうみもなみをたててそのかぞくをみまもっている  
昼寝ボーイ

3 こどもはずるがしい  
ふだんはすなおだがつごうがわるくなるとうそをつく  
でもそこがかわいかったりする 車オタクの13歳

4 幼いときはなにもわからない  
これからすべて始まったから  
そしてこれから歩き出す  
まだ何もかもわからないが  
助け合いながら冒険する 学級新聞発行者

9 海は生き物の母だという  
海の中にいる生き物たちも  
華やかでまた美しい ユウ

10 海は人の気持ち  
簡単にうばってしまふ  
海を見れば 嫌なことも  
忘れてしまふ  
そこが、海の良いところだと思う  
そこらへんの中学生

11 うみはなぜ「あおい」のか  
山はなぜ「みどり」なのか  
どうやってしぜんにいろがついたのだろう チロル

12 「いろ」というのは人の感情だろう  
怒りがたまっているときは「あか」  
冷静なときには「あお」というように  
うみやまが あおやみどりに感じるの  
心は落ちついているからだろう  
てにすほーい

5 冒険することどもは  
夢に向かったただただ  
一生懸命に走っている M.Y

6 うみはとてつもなく  
青くて美しい だが  
昼と 夜のうみは  
まったくちがうのは  
なぜだろう ディズニ大好き少年

7 昼は昼のよさがある  
夜は夜のよさがある  
それぞれがうのもまた美しい  
ばぶろびがぞ

8 おだやかな気持ちで  
見つめる海と  
怒った気持ちで見つめる海も  
またちがう  
今日はどんな美しい海が見えるのか  
中島 ソラミ

13 うみは冷静なのだろうか  
波がおしつけると大きな音がでる  
これはどういときなのだろう 流れ星

14 学校のチャイムの「音」  
心臓のこどうの「音」  
いろいろな「音」があるけれど  
だれも正解を知らない  
人の心みたい  
1-2 あげばん大臣

15 人生に正解などあるのかな  
人生に不正解などあるのかな  
人生はなぞのまま終わっていく  
犬になりたかった人生

16 世界はなぞにつつまれている  
誰にもとけないしわからない  
いくらといてもなくならない  
どれほど考えても  
答えはわからない  
NEW GAME

そして二人はつむがれる

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむのはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 ははそのことばになんどもたすけられていた  
まいにちのしゅっきんやぎんじよとのつきあい  
かじにいくじとんでもひとりでごなすひび  
そんなたぼうなはのゆいいつのよりどころ  
それがまっさらな子どものことばだった

Haru

3 ちちのいないふたりきりのくらし  
さびしいきもちをかくすようにあふれるのはふかいあいじよう  
子どものまっさらなことばにはそれがつまっている

楓

4 ふとおもいだしたずつとむかしのおもいで  
ちいさないのちにきがついたあのひ  
きつとゆめみてたみらいへのおおきなきぼう  
ちいさなひかりはきえずゆくみちをてらして  
きつとあのこにやわらかなあいをあたえた

朋

9 本当は気づいていた、おたがいの心の隙間  
埋める方法はまっさらなことば  
だから二人はつむがずにはいられない

稲葉実歩

10 海はおだやかにふるさとをあらって  
海は波をよせてはかえし、  
海は永遠にそのいとなみを続け、  
海はそれが当たり前だと思っ

よしお

11 けれども海は非情であり  
ときにはまっさらな子どものことばを消し  
ときには母のことばも消してしまう

Haru

12 とくに海には意図はない  
しかしそれ故に平等であり  
残酷にこちらをふりまわす  
いつも砂浜に残るのはやるせない思いと  
削り取られた希望だけ

稲葉実歩

5 いっしょうけんめいだけど、またかたちにならない子どものことば  
ははのかわいたくちびるにえみがうかんで  
うみとははどふるさととわにそこにいるかのよう

よしお

6 いつかぼくもあのうみみたいにおおきくて  
りっぱなおとなになるからね  
そしておかあさんにたくさんおてつだいであげるとだ  
おさない子どものあたまには、ことばがたくさんつまってなくて  
つたえたいことがつたえきれない

稲葉実歩

7 それでもすこしかたちになった子どものことば  
たくさんあふれるさびしいきもちのなみにのまれて  
いつのまにかすべてなくなってしまうた

朋

8 なみがひきかえしたときにはもつとおおくのことばをおくりたい  
ありがどうをつめたことばを  
母がくれたことばにつまっているきぼうやひかりがかがやくような  
ことばを  
笑みをうかべたくちびるがふたつ  
きょうもつむがれるまっさらなことば

楓

13 すべてをおしながした波をしずかにみつめる  
こぼれた温もりとことばはだれも拾えない  
落ちたなみだは海にとける

楓

14 しかし子どもはその事実気づかず  
いつものまっさらな笑顔で  
いつかぼくもあのうみたいにおおきくて  
りっぱなおとなになるからね  
そう何度も何度もまっさらなことばを母に投げる

Haru

15 たどたどしいけれどちよつとたくましくなった子どものことば  
母と海はまぶしくふるさと照らす  
子どももまぶしくふるさと照らす

よしお

16 拾えなかったことばと温もり  
いつしか時の流れにのって  
まぶしいふるさとたどり着く  
それを見つけた母と子どもの  
笑顔の糸が結ばれる

朋

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 子どもには子どもの世界があるという  
子どものことばはやがておとなの言葉に  
おとなの言葉はときどき子どもの世界を忘れる  
あるとき言葉を忘れさせないために文字が生まれたという  
地球は言葉と文字の宝宝箱

小西政司

3 ヒメマスがぼくに話しかけてきたよ  
水底においてよ  
みなそこで遊ぶほうよ

小澤高好

4 大人は来ちゃダメ  
さあこれからぼくらの  
自由時間  
キラキラ太陽が  
水面に輝く

サン

9 耳の奥にようやくたどりついて聴こえてくるのは見知らぬ国の調べ  
ポルドー色の渦のなかにポツンと立って見上げている  
私は異邦人

おすみ

10 きみはどこからやって来たの  
見上げた先から声がする  
声はするけど誰もいない  
そっと耳をすましてみると  
遠くに駆ける懐かしの音

のの

11 難民ではない、ただ住む場所を追われたただけだ  
故郷を棄てたわけではない、ただ帰還困難区域に指定されたただけだ  
確かなことは、多くの無関係と無関心の連鎖によって

小西政司

12 わたしの すむ場所は ここ  
子どもが 空に手をかざす  
ゆびのあいだから もれたひかり  
ざっそうのつゆに かがやく  
だいちのぬくもり こどものふるさと

服部静子

5 どんな世界があるのかな  
案内役のヒメマスは  
どんだんぼくらを連れていく

のの

6 行こう！行こう！  
遠い あの水水平線の向こうへ  
夕焼けの帰るところ  
虹の始まるどころ  
いつか夢見たところ

おすみ

7 遠くへ行こうとしたけれど  
迷いこんだのは心の中  
鼓動が聞こえてくる

サン

8 夢のあなたに聞こえる音は  
心の古地図に見つける街は  
雨音  
石だたみ  
空の瓶

小澤高好

13 水も空気も、その土地その土地の香りがある  
ことばも体も、その土地その土地のぬくもりがある  
ぼくの街わたしの町、三島

小澤高好

14 見るだけ見せるだけではダメ  
聞くだけ聞かせるだけでもダメ  
嗅ぐだけ嗅がせるだけではダメ  
味わうだけ味わわせるだけでもダメ  
触るだけ触らせるだけなら……きつといい〈わが住処〉

小西政司

15 つめたい！  
ふるさとの幼き日の記憶は私を形成する  
触ることは知っていくこと

のの

16 触ることは伝わること  
心通わせたい  
素直な気持ちで  
さようなら  
またあした

サン

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 自分はただ流されるだけでいい  
世界の音に  
ただそれだけでいいそれだけでいい

井原健登

2 水平線からはげ頭がゆらゆらと出て  
窓を開けたら差し込む朝日に潮の匂い  
家からは朝のごちそうの匂い  
ちちははの笑顔がはげ頭より眩しくて  
生きてるって感じる

コーヘー

6 世界はまわる  
くるくるまわる  
美しく、おだやかに  
しあわせの音が弾ける  
わたしの手を引く明日の希望

富田百々花

3 外を歩けば遊びまわる子供たち  
彼らの笑顔がテカテカ照らされて  
愛おしいって感じる

関野巽

7 やがて時間が影をのぼす  
音楽が静かに響き渡る  
空でダイヤが光り出す

東雲ケイ

4 町には音楽が響き渡る  
ガラス玉の音が弾ける  
楽しい音に悲しい音  
全てが音に包まれる  
音で世界が回り出す

東雲ケイ

8 ダイヤはペアつと輝いて  
砕けてキラキラ落ちてくる  
ひかるカケラはわたしたちに  
一緒に踊ると  
手を差し伸べる

関野巽

9 きらきらきらり輝くダンス  
素敵なステップ真似してよ  
素敵な輝き隠さないで

富田百々花

13 ふたつが交わる時間帯  
気づけば空にカラス飛んでいて  
水平線にはげ頭は帰っていく

関野巽

10 天に煌めき地に響き  
現世を光で包み込む  
華やかに煌めく光の舞  
その光は何よりも暖かくて  
その光は何よりも冷たくて

井原健登

14 あのはげ頭よりも早く  
あのカラスよりも早く  
帰ろう帰るべき場所に  
開けよう家の扉を  
はげ頭に手を振って

コーヘー

11 光は影を造り  
影は光を造る  
照らされてるのに影の中

コーヘー

15 家に帰れば暖かい食事と家族が待っている  
けれどそれはいつまで続くのだろう  
いずれ終わりが訪れる、誰にだって

井原健登

12 ゆらりと揺れる影の中  
眩しく柔い光さす  
まぶたを閉じたら影の中  
まぶたを開けば光が照らす  
ちぐはぐな光と影を抱きしめた

富田百々花

16 永遠など訪れない  
それでも幸せだと言えたなら  
一瞬の永遠を感じたなら  
それは未来で咲き誇る  
それは未来で光り出す

東雲ケイ

宙返りのかぞく

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはほのひたいにあきひがまして  
うみはおだやかにふるさとあらつている

俊

2 はだかんぼがゆく  
田んぼ、蛙、くさいはたけ、ふんでじやり道、なめたら川、むきだして  
わらう、う、足のうらがいたくなる、わらう、ちつくり松林、足の浦を  
出で  
んぼ、んぼ、漕いでく、んぼ、んぼ、あそこ、いちばんさびしい入江に  
着こう  
あそこはだれもひとり、いのり、死ぬかもわからないよ

楽

3 思いやりに救われず、復唱できないお、と、な、た、ち、は、  
淀んで鳴いて踊つて座つて  
遠くの鳥に乗り移ろうと手を伸ばしている気になつている

伽

4 したへ、うえへ、切り裂かれ、取り残される空間、  
それをふるさとと呼んだことがあつたが、変わらぬうみはおだやかである  
老人は幸せそうに空に浮かんでいると、鳥が脳味噌を啄み、ぎゃおんと  
鳴いた  
ぼおー、汽笛の音、んぼおー、ぎゃおん、ぎゃおん、ぎゃおーす、生命の音が、  
途切れる瞬間、破裂した人体に群がるありんこ

花

9 出会つた人がシロハラとヒヨドリとムクドリの見分け方を  
教えてくれました。あれは違うあれはモズ雌  
今飛んだ

比

10 飛ぶのでなく、落ちるとたしかに知つていて、足場を蹴つた 地球から  
いなくなる  
のでないと知つていた 落ちながら居る 落ちるから居る いままだ  
万分の一秒、  
ちがう、あまい言葉にならない 氷水で締められるときの冷たさに泣く、  
ちがう、  
あまい言葉にならない どこにもない 黙る 言うこと無い 黙る 眼の  
前に地球  
にぶつかつていく もう すぐぶつかつていく 飛んでいた気がする

楽

11 星にいた孔雀は宇宙を舞つて  
雪をくぐつて、点に、点がかさなつて、  
大きな火の粉をあなたは見ていた

洋

12 《衝突》の末、訪れた沈黙、帰帰する原始的記憶。  
小刻みに、連続する、ひかりの点滅が弱まっていく。  
怖くなり、必死に、しがみつくと、それは巨きな根っこ的一本である。  
目を凝らせば——乳白色の球体たち、ばらばらと、他の根っこに  
くつついている。  
静かに、自分の番を、待つている。

花

5 みなれてる、動脈のれきしがわたしをみてる  
こどもになつた母は夢におびえて逃げ出して、夜中の納屋にかくれて  
いました  
「一人で運べない家具はもう買わない」

洋

6 父のみた夢をくりかえす  
河原に芒がゆれている  
父のみた夢をくりかえす  
犬はどこで吠えているのか  
聲音が遠ざかる

比

7 繭の中はあたたかい、  
未熟な手足は空気に触れて  
地球から剥がれ落ちたいと願う

花

8 靴は履かせずに眠らせてくれ  
傷んだ足場を取り外して白いシューズをかけておけば  
破裂fichしなfachがらfich風化fachしつくfichfach  
ちいさな音をたててはじけたら最後、こころも、ことばも、残せるものは  
全て  
逃げて、逃げていく

伽

13 キスをしてもいい？  
もっかい、ひかりをはじめようよ キスを  
していい？ 横むき ずっとみていますふたつ いましキスから！

楽

14 ころげ落ちて谷底にみつぶ  
よつぷはそれでのつとります  
ごつぷで人相むつぷは薄闇  
あつちになつぷし  
やつぷはここのとおせんぼ

比

15 そしてこだけのはなし  
元元的思考を二元的思考に戻したら  
もう飛び立つかないじゃない

伽

16 つごもりがくればこつがわかる  
矛盾だらけのうちあけはなしの  
ことの本途を晴らすこつ、いきをして  
ねむれ、ねむれ、  
かなしいこともたち、おとなたち

洋

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 やわらかくもなく あつくもなく  
あなたの言葉は 外に向けて放りだされる  
うつろな瞳に 映る夕陽  
脈絡はたどれない  
記憶も 故郷も ただ遠い

カメ

3 記憶は紡がれる 美しい織物のように  
記憶は流れる 清らかな水のように  
そしてあなたは 解き放たれ 自由になる

すずまり

4 記憶は 重く堅く 闇の中の孤独  
太古の地層のうめきの断層の中  
10年かけて 湧き出る水脈に運ばれて  
土のことばと 天のことばは  
出会うだろうか

矢羽根

5 ポコ ポコポコポコ  
大地から染み出す清水のように やわらかな芽吹きのように  
あなたのことばは天に向けて放り出される のんとも

6 放たれた ことばは  
ときには ふんわり 毛布になり  
だれかのところを あたためる  
棘ある茨をなげたらば  
あの子は あの子は 泣くだろうか  
すずまり

7 からだの芯にうづく痛み  
独りじつと血膿をながす  
目を閉じががす ことばの行方  
美和

8 夢の続きを見ましようか  
波の間に間に聞こえる音は  
金の鈴 銀の鈴 母の鼓動  
ただ生暖かな 優しげな  
まどろみさがす ことばなきことば  
のんとも

9 夢のつづき 昔話の夢 紙芝居の鈴の音(ね)  
それが今も聞こえてくるんだ  
絵本大好き 何回も読んで母さん

矢羽根

10 ざつぷーん じゅわしゅわしゅわ  
ざつぷーん じゅわしゅわしゅわ  
よせてはかえず波の彼方  
桃のしるしの帆かけ舟  
ひかりのなかに とけていく

美和

11 やわらかい あこのてをとり  
やすらかな ねがおにそっと ほおよせる  
とわにつづくよ ものがたり

カメ

12 たんぼぼのわたげ とんでいく  
ふうわりふわふわ 旅にでる  
夢をいっばい つめこんで  
どこまでとんで いくんだらう  
どんなものがたり 紡ぐだらう

すずまり

13 ふうわりふわふわ ゆきがふる  
燃える暖炉に母の笑み そつとこの手を伸ばした途端  
すべてのマッチは燃え尽きた  
のんとも

14 凍える足 かじかむ手 冷たい夜空  
かすかな星明かりよすがに歩く  
迷い 戸惑い 一人さ迷う  
あなたの物語は 内に向かって凝縮していく  
その足跡は 英知あふれる道しるべ  
カメ

15 いつの間にか 白んできた宙(そら)  
大地から立ちのぼる水蒸気の抱擁  
聞こえてくる 鳥のさえずり 母の祈り  
美和

16 語り継がれるものがたり 夜空・宙(そら)へと すべての祈りは  
包まれる  
6年間待ち続けた宝物を 宇宙から届けて  
さらに はるかな 11年の旅にでた はやぶさ2よ  
命の時間を超え 命を呼び起こして 人のこころを喜びで満たす  
多くを語りかけ 灯(ともしび)をともし続ける

矢羽根

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 「あのね、あのね…」  
「うん、なあに？」  
こころもかいわもはずんでく

凧

2 歩きはじめたばかりのこども  
あさひに向かって歩きだす  
たかくのぼした小さなりょうて  
まるい陽をつかもうとする  
そのせなかをみまもるはのまなきし

糸

6 さらさら さらり  
風が気持ちいいね  
きらきら きらり  
みどりがきれい  
うみがキラキラまぶしいね

碧

3 ふりむくこども えがおかがやく  
にぎりしめたてをはなさずに  
大きく一歩 歩きだす

碧

7 「あのふねはどこに行くの」  
とおいうみのむこうがわ  
まだしらないせかいがひろがっている

糸

4 さらさら さらり  
さらさら ふわり  
桜が海風に連れられて  
ふたりのほほを  
かすめていく

珠

8 陽がしずむ  
さりぎわにのこす あしあとふたつ  
なみがおしてはひいていく  
消えたあしあと  
どこいった？

凧

9 かなかなかな かなかなかな  
とおくできこえるひぐらしの声  
あたたかなははのて

珠

13 すんだ空気にまぶしいあさひ  
ざくざくざくざく しもぼしら  
あしどりがかるく こころもおどる

珠

10 ひらひら ひらり  
おちばがおどる  
かさかさ  
がさがさ  
秋のあしおと

碧

14 ほほにささるつめたい風  
かじかんだて  
さむさにまけず  
かけまわるこども  
マスクからもれる白い息

碧

11 空をみる  
ひるとよるとが  
まじりあう

凧

15 ひとけのない冬のうみ  
あさもやのなかをそつと風がながれて  
白いなみまに消えてゆく

糸

12 ながくのびるかげ  
「おおきくなったら、なにになるの？」  
やさしくみみをかたむけるははのこえに  
「とおくの国にキラキラするものをみつけない！」  
はてしなくひろがる夢

糸

16 さらさら ふわり  
きらきら きらり  
かさかさ がさがさ  
ざくざく ざくざく  
四季をかんじるやさしい音 ははとのさんぽ

凧

ぬくもりのバトン

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 かぜはひかりとともだち  
こがねいろにきらめきわらう  
みなものステージ

有

2 あー あー  
かわいいね  
うー うー  
きれいだね  
さくらがいはほっぺいろ

政

6 やさしいふるさとのかぜは  
ははとおさなごのほほをふんわりなで  
あたたかいふるさとのひかりは  
ふたりをそととつみこむ  
おかえり ただいま

順

3 しぶきおいかけいったりきたり  
からだほかほか  
しろいき

聡

7 きこえるやさしいこえ  
ふりかえるとすぐそこに  
おおきなてとえがお

政

4 そらはうみといつもいつしよ  
あおいときめきつれてくる  
そらにあこがれて  
うみになりたくて  
かぜをさそう

美

8 おもいだす  
むかしははときたうみ  
いまはわがことふたり  
しおかせにのせてつたえたい  
あのとときとおなじおだやかなぬくもり

聡

9 つながるぬくもり  
つながるきもち  
むかしもいまもこれからも

美

13 おさなごはやがてこのてをすりぬけて  
ひとりでたびだつときがくる  
さようなら うみ

聡

10 おおきなふるさとのうみは  
ゆうきゆうのときをきざみ  
ささやかなふるさとのぬくもりは  
ときをこえてよりそう  
おかえり ただいま

有

14 なみのおとをせなかに  
やさしいかぜと  
ゆつくりきままに  
わたしはわたしの  
ひかりのさすほうへ

美

11 まーまー  
ははのむねにもどってくる  
おさなごのあいらしいひとみ

順

15 どこへでもいけそうなきがする  
なんにでもなれそうなきがする  
このうみははのうみ

有

12 ぎゅつとだきしめる  
わたしのだいいないじないのち  
ぎゅつとだきしめられる  
わたしのだいいないじなこころ  
いつかのあのひとおなじように

政

16 そんなわがこのみらいをおもいながら  
ははおさなきひにもらったこのぬくもりを  
そのうでのなかのちいさないのちにつたえつづける  
このふるさとのひかりのように  
このふるさとのうみのように

順

光の種

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 まだ冷たい風のなかでかすかに感じたひざし  
つもった落ち葉のなかから  
めざめたのは春の妖精

千恵子

2 あたたかいは遠い記憶  
指先つめたい冬のあさあなたがくれた  
みて、たんぽぽのわたげだよ  
吐く息白くホワ ホワ ポツ  
そうね ほんとにそう ありがとう 目と目が合ってほほえみ  
あつた

綾子

6 めざめた春の妖精は  
ふんわりと虹色の風につて  
木々の間をすり抜けていく  
ホワ ホワ ポツ ポツ と軽やかに  
虹色の光のリズムにのって

直美

3 ホワ ホワ ポツ  
虹色シャボンの泡 はじけ  
笑み合わす子どものはしゃぐ声

知恵子

7 青々とした木々が歌ってる  
今日は天気がいいね  
明日の天気はどうなるのかな

お粥

4 君と探したみえないモノたち  
流し台を歩いてた水の精イルミネーションの電気の精  
あわてて紙に描き留めた幼き日の幻想  
君の中に眠らせておいてね  
いつか来る春に目を覚ます

亜子

8 天気の良い日に散歩して  
青々とした木々に囲まれ深呼吸  
木漏れ日キラキラ足元照らす  
小鳥のさえずり聞きながら  
今日もいい日と心が躍る

知恵子

9 チュン チュン ピピピッ  
小鳥のさえずり聴きながら  
大地を踏みしめ 空を見上げる

直美

13 光の種が芽生える調べ  
やさしさにつつまれ奏でてゆく  
自分のリズムを刻んで歩いてゆく

知恵子

10 ふみしめた大地  
まかれた種は芽吹き  
花がさき  
太陽のめぐみを受け  
種はみふる

千恵子

14 扉を開けたその先に広がる世界  
少し戸惑い振り返る  
大丈夫だよ  
一歩踏み出す勇氣もっている  
タン ター タ ター タ タンタン

綾子

11 豊かな自然と生きる私たち  
信じる心待つ心感謝の心にあふれ  
小さく一歩 大きく一歩

綾子

15 踏み出した一歩は歩みとなった  
大地につけた足跡  
思い出のかけらとなった

千恵子

12 時折り 後ろに下がっても  
少しづつでも 前に進もう  
私たちは地球の宝だから  
一人ひとりが光の種  
母なる大地に生きる種

直美

16 立ち上がれ私たち  
生きる証を知るために  
大地より遠く宇宙(そら)へ泳げ  
ドクンとした命の拍動はあなたをも振るわせ  
愛がみえた今確かに生きてる

亜子

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして

うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 あたたかい朝日にてらされて  
おだやかな海に

ゆられて動いている

ほかほかゆらゆら  
きもちがいいな

くらげ

3 気持ちのよい日に照らされて  
すくすく育つ

おいしいお野菜

ずっきーに

4 お野菜？ あたたかい日光に照らされて  
元気に育つ子供たちから

笑顔があふれてくる

その笑顔に照らされて  
新しい日がやってくる

鎌吉 おしょう

5 新しい日のくり返し  
それをくり返していくうちに季節は変わり1年がたつ  
青春なんて一瞬だ

ヨロシカ

6 今はその瞬間しかないもの  
一日一日は一瞬一瞬のくり返し

でもそんなこと考えて生きていくのはめんどくさい  
だから人はそんなこと考えもせず生活している

でも本当は 考えていかなきゃいけないのかな？

〇〇〇

7 ちいさい子は笑ってふざけて叱られて泣いて  
少し泣いたら すぐ笑う

「反省してよ」と思うけど「まあいいや」で終わる

妹の笑顔

葡萄

8 妹の笑顔

ものすごくかわいい  
けれど、少し困る

けれど、かわいいな

女子力高めの獅子原君

9 弱いけど強い  
その『かわいい』ものを  
守るためには

みかん様

10 かわいい動物を見ると  
心がいやされる

かわいいものを見ても  
心がいやされる

人間はかわいいものに弱いかもしれない

たまご

11 「かわいい」はかげもひかりも  
あかるくてらす  
そのいやしは たしかに人をうごかした

こえだ

12 かげとひかりをてらしたら  
人の心も  
てらして いやして  
しあわせがたくさん  
あふれている

柑橘系フルーツ

13 何年も何十年も海はふるさとをあらっている  
海は空を見上げ 空はふるさとを見る  
きれいになった ふるさとを

真夜中

14 そのとき  
こどもたちは空を見上げ  
海を見る

そしたら  
笑顔があふれてる

あや

15 笑顔で世界が包まれるとき海も空も笑っているだろう  
それぞれの夢やあこがれを叶うと信じて疑わない  
ずっと世界が笑顔のままだとせつなに願って

飛鳥

16 世界中の笑顔は朝日となり今も輝いている  
しかしなぜだろう  
時がたてば周りはまっくらになってしまふ  
でもね よーくみてごらん

奥にはきつと たくさん 星が輝いている

永遠の旅人

1 たどたどしいけれどまっさらなこどものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがさして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

2 この夏ふるさとの街に水が溢れでた  
60数年ぶりだよ！  
ドンドンと流れる水 群生した水草のゆらめき  
校庭のわき水でのどを潤した思い出  
昔も今も子どもは水遊びにふける

利治

3 おさなこは  
はやくてきよくてふかい  
かわにかおつけている

正

4 ゆらゆらゆら  
通学の橋から見下ろす柿田川  
湧水と戯れ遊ぶ マス アユ 水藻  
産卵色のアユは次々と父のタモに飛び込み  
立ちこむる川霧 前行く母はかすみゆく

淑子

9 話をする友人が少なくなつたと嘆く母  
年を重ねる重さと寂しさ  
子どもの声のしない故郷の冬

雅子

10 今年は何枚の年賀状が届くのだろう  
落ち葉が かさこそ  
ひと吹きで冬になる  
かさこそ かさこそ  
ひと晩で丸裸になる

明子

11 夜空のむこうに 流れ星  
小惑星リュウグウからの贈り物を届けたる「はやぶさ2」  
きみは再び旅にでる 11年後の出会いを求めて

利治

12 冬空に映えるもの  
星、月、そして富士  
冷たい乾いた空気に縮こまりながらも  
富士の見える日はいいことがありそうな  
ちよつと心が温かくなる

雅子

5 こどもは母を追いかける  
つかまえた母の手はやわらかで  
あくまで川の水は澄んでいる

明子

6 遠い日の夏休み  
山の川で泳いだこと  
水の冷たさ、川の怖さ  
下流の川は広くよどんで  
それでも花火の影を映す

雅子

7 「あの音は聞きたくねえ」祖母は花火を見ない  
ヒュールルルー 星を切り焼夷弾は街に降り注ぐ  
炎の中 子の手を握り千本松原へ逃げのびた夜

淑子

8 長泉・元長窪の山上からは  
はるか沼津の街がよく見える  
沼津へと山上はるかゆくヒコーク  
桃沢の清流深く浅く疾（はし）るハヤ  
子どもの手からすばやく逃げる、と亡母

正

13 世の中に  
富士や桜のなかりせば  
春の心はのどけからまし

正

14 ありがとう  
いまだから あなたにつたえることば  
うれしいさは  
えがおにする  
おとな こども ころろはのどかに

利治

15 わっははわっは わっははわっは  
大きな声で笑うのさ  
ふるさとの空に 山に 川に こだまする

明子

16 不二の山がわらった  
ヤマトタケルも頼朝も家康もその裾野を駆け  
オトタチバナも北条政子もお万の方も泉で遊び  
アマテラス日のもとさらさらと  
伊豆の浜からこどもたちは跳びあがる

淑子

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがきして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 かみつけばどうるととびちったあまい血しぶき  
いとおしくなぞるこめかみにSIMカードさして  
夜空あのままに火の粉がまっている

べちこ

2 いってらっしゃい  
いってきます  
むかしもいまも変わらないことば  
にこにこえがおの日も

ぶんぶんふくれつつらの日も

ふう

6 カードを抜いて空を見た  
火の粉は○(※)になり落ちてきた  
胸にとまってあたためた  
消えないで消えないで  
寒くなるから消えないで

ひろ

3 あおあおきいれつどわがまなもものことば  
みどりのえがおがいつかのきのう  
ほそめたまぶたにかきのみひとつ

めん

7 気がつけば夜空をこがす大きなほのお  
あれはとおいいつの日か  
ほのおのむこうに見えるのはだれ

まっこ

4 かきのみさがしにゆきましよう  
しぶいかきならかわをむき  
ひもでつるしておきましよう

「おひさまあまーくしてくたさる」  
おねがいすればほしがきに

まっこ

8 心がほどけてのの花もゆる  
あなたとわたし  
わたしとこのこ  
ちようちよはどこへ  
さあどうぞ、花の銀河をかけぬけて

めん

9 アサギマダラは海を飛ぶ  
着いたところは  
未知の国

ひろ

13 もくもくけむりのはしごが架かる  
時空をゆがめるむしめがね  
拝啓 ダサイ根なし草

めん

10 かんげいのまくで  
いってらっしゃい！  
きらきらほしのきもちいい朝  
きゅーつとすっぱいはちみつかけて  
とろけるクッキーめしあがれ

べちこ

14 ひらひら ふわり  
まいおりにきたふしぎな手紙  
見たこともない文字なのになぜ  
すらすら ぴたり  
はしごをのぼってこっちへおいで

ふう

11 わあ おいしそう  
ぼーんととんだら  
そこはうみのそこ

ふう

15 おひさままで10キロメートル  
あせのしずくは砂漠の雨に  
しらないあなたで胸がいつぱい

べちこ

12 たいやひらめに別れを告げて  
歌うレノンのは波の上  
銀河ながめて涙する  
りゅうぐうみやげは謎めいて  
開けてびっくり Love and peace

ひろ

16 わたしとあなたと とけあつて  
過去と未来と つながって  
なんてきれいなあお(碧)い星  
あなたに会えてよかった  
みんなに会えてよかった

まっこ

※「○」は赤で表示。「輪」と読む。

1 たどたどしいけれどまっさらな子どものことば  
ほほえむはのひたいにあさひがまして  
うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

5 おひさまがほほえみかけてくる  
あそぼう  
あそぼう

Ryu

2 さらさらさらならん ギューン  
さらさらさらならん ギューン  
ひびきあう鼓動  
ゆっくりあるく  
まっさらなあさ

Kuro

6 あさぎいろのびーだまひとつ  
てにとつて  
やわらかなひかりにすかしてみる  
あらら これはだれ?  
これは きょうのわたし?

ねこ

3 なぜがこえをかけてくる  
おはよう  
おはよう  
おはよう

ねこ

7 とおい記憶がよみがえる  
あつい夏の日  
友と鳴らしたラムネびんのすずのおと

なな

4 今日は何してあそぶ?  
何をみつげよう  
あなたと一緒になら  
どんなことも楽しいね  
どんなこともうれしいね

なな

8 じりじりじりじり ちりちりん  
じりじりじりじり ちりちりん  
眩い 日射し  
かけだしていく  
ふたつの麦わら帽子

Ryu

9 ふたつのかげゆれながら  
あしあとあらわれながら  
いっしょにかけてくる

Kuro

13 なつかしき想い出を そつとのせる  
きらめくひかりのなかで広がる笑顔  
澄んだ瞳を映す未来

なな

10 なみまにうかんだむぎわらぼうし  
あそびつかれたこともたち  
やさしい母のよぶこえに  
あまくはじけるおとがする  
きみとすごした あの夏の日

なな

14 よせてはかえす  
あけてはくれる  
くりかえす鼓動のなかで  
たしかにあるもの  
しずかにうつりゆくもの

Kuro

11 なみは いつもわたしのこころをうみのおくそこにさらっていく  
そして そしらぬかおで  
またあしもとをやさしくくすぐる

ねこ

15 あえないときもこころにともる  
かけがえない いのちのつながり  
うまれてきてくれてありがとう

Ryu

12 さらさらさらならん ギューン  
さらさらさらならん ギューン  
のばされた小さな手のひら  
あどけなく笑う  
おだやかな うみ

Ryu

16 点描のような日々  
それは色をとめない線になり  
じゆうにのびていく  
線はつながりつむぎあい  
みらいへとつながっていく

ねこ

ことばリレーによせて

谷川 俊太郎

全体にとっても新鮮な印象です。言葉を使い慣れている方もいらしたのかもしれませんが、連詩という形に対して、皆さんが初心に向き合っていることで、言葉が生き生きしている感じですよ。連詩の魅力はその動き、ダイナミズムにあります。皆さんが知らず知らずのうちに、ひとりひとりその動きに合流して行ったのがわかります。

後戻りはするな、とにかく前へ進めというのが、連詩の先輩大岡信の教えでした。他人の言葉を自分の言葉に迎え入れて、自分の言葉を他人に渡すというのは、連詩に限らず人との付き合いの現場でも日々行われていることで、それは人間の言語活動の基本であるとも言えるでしょう。各チームの参加者の連詩を終えてからの感想も、大変興味深く読みました。

谷川俊太郎 たにかわ しゅんたろう (1931～)

詩人。東京生まれ。高校卒業後に詩人としてデビュー。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。以来、詩作のほか、絵本、エッセイ、翻訳、脚本、作詞など幅広く活躍。その自然体で旺盛な創作力によって生み出される作品は、子どもから大人まで多くの人々を魅了している。最新作に詩集『ページュ』、堀内誠一との共著『音楽の肖像』。大岡信とは1970年代からともに「連詩」を行っている。互いに「詩友」と認める間柄で、同年代の対照的な詩人ながら深い親交を結んでいた。

## 【連詩Q &amp; A】

## ●そもそも「連詩」とは？

二人以上の人が、順番に数行ずつ詩をつなげていく詩作の形式。一般的に一人で制作される詩に対して、連詩は複数の人々が共同して詩を完成させる。

## ●連詩はいつ頃からあるの？

1971年に、大岡信が所属していた詩の同人グループ「權」（メンバーは茨木のり子、川崎洋、岸田裕子、谷川俊太郎、吉野弘など）で、詩の共同制作を試みたことから始まる。その前年に、大岡が俳人の安東次男らに誘われて行っていた連句が着想になっている。連句や連歌にみられるような、日本に古代から続く共同で詩歌を作り合う伝統を、個人的になってしまった現代詩の場に持ち込んでの実験であった。

大岡信は80年代以降、海外にて諸外国の詩人とも積極的に連詩を行う。個性や独創性を至上とする西洋的な価値観に対して、共同制作の形をとる連詩は衝撃的で、海外の詩人たちに大きな影響を与えた。

## ●連詩はどうやっておこなうの？

例えば連句は、五七五（長句）と七七（短句）を交互にならべていき、一定の長さ（五十句、百句）に達するまでつなげる。その他にも細かい規則があるが、連詩には定まったルールはない。作る詩の行数や全体の詩の数にも特に決まりはなく、今回の“ことばリレー”然り、自由に取り決めを行って進めていく。

## ●連詩で大切なことは？

受け渡すこと。前の人を作った詩をしっかりと受け止め、それを自分の詩の中でどう展開させていくか、それは同時に、次の人にどう伝えていくかということ。大岡信いわく、独りよがりの詩が出ると、連詩全体が活気を失い失敗してしまう。受け渡すことで生まれる信頼感は、参加者同士の心を活発にし、自分一人で作っているときには思いつかなかったような詩をも作らせてくれるという。

## 【連詩の広がり】

## ●教材として、小学校の国語の教科書に掲載。

『『連詩』を発見する』（『みんなと学ぶ小学校国語6年下』学校図書）／「連詩に挑戦しよう」（『新しい国語四下』東京書籍）

## ●宇宙連詩

宇宙と地球とで連詩をつなげ、詩を通して宇宙や生命について考えるJAXAの取り組み。2006～2009年にかけて3回行われている。

## ●しずおか連詩の会

静岡県文化財団と県が主催の、静岡が誇る毎年恒例の文化事業。2020年度で21回目の開催となる。

## ●リアルタイムオンライン連詩

大学を超えた詩作の場、「インカレポエトリ」の学生が考案。Googleドキュメント上でリアルタイムに詩が連ねられ、更新されていくスピード感あふれる試み。

## 【大岡信の主な連詩関連書籍】

- 『うたげと孤心』1978年 集英社 ※2017年に岩波書店より手軽な文庫版が刊行。解説：三浦雅士  
——古典詩歌の創造にみられる日本的な美意識が、「うたげ」と「孤心」という相反する要素の結びつきによって構成されることを見出した画期的な著作。
- 『權・連詩』權同人著 1979年 思潮社  
——大岡信や谷川俊太郎らが所属した同人誌「權」のメンバーと行った連詩作品集。連詩制作時の記録も掲載、実験的な試みのレポートともいえる貴重本。
- 『連詩 揺れる鏡の夜明け』トマス・フィッツシモンズとの共著 1982年 筑摩書房  
——大岡信がミシガン州に滞在中、友人の詩人・トマス・フィッツシモンズと試みた連詩作品集。大岡にとっての、初の外国語（英語）による連詩制作体験。
- 『ヨーロッパで連詩を巻く』1987年 岩波書店
- 『ヴァンゼー連詩』川崎洋らとの共著 1987年 岩波書店
- 『ファザーネン通りの縄ばしご』谷川俊太郎らとの共著 1989年 岩波書店 朗読テープ付  
——以上3冊、大岡信が海外で諸外国の詩人たちと制作した連詩について、その作品と体験談を紹介。
- 『連詩の愉しみ』1991年 岩波新書  
——大岡信はどのようにして連詩をはじめたのか、そこにどんな意味を見出しているのか、模索段階にある連詩について、一旦のまとめとして執筆された本。
- 『連詩 闇にひそむ光』2004年 岩波書店  
——海外の詩人も交えて行われた、「しずおか連詩の会」第1回～第5回の作品をまとめたもの。参加詩人たちの座談も掲載。
- 『歌仙の愉しみ』丸谷才一、岡野弘彦との共著 2008年 岩波書店  
——著者3人が巻いた連句作品と解説掲載。連句の発想と展開の跡がたどれ、初心者でも楽しめる。

## 大岡信 おおおか まこと（1931～2017）

詩人。三島生まれ。沼津中学（現沼津東高校）時代から詩作を始める。1956年、第一詩集『記憶と現在』を刊行。詩作と並行して、詩論をはじめ美術や古典文学に関する批評を活発に展開。朝日新聞の長寿コラム「折々のうた」では詩歌の魅力を多くの人々に伝え続けた。「連句」から着想を得た「連詩」を海外の詩人とも積極的に試み、日本の伝統的な文芸にみられる他者に開かれた創作の場を現代に息吹かせた。故郷・三島の姿は、その水の豊かさとともに大岡の詩に多く描かれている。

出すこともありました。ことばリレー、最初はまごまごしましたが、跳んでもよいと知ってからは、楽しく自分なりに遊ばせて頂きました。まとめて頂きましてありがとうございました。◎正：当初はドギマギしましたが、やってみるとワクワク。愉しかったです。◎淑子：詩は苦手でしたが、今回、思いのほか自由に世界を描くことができ楽しかったです。前に書かれた方たちの言葉から、忘れていたおばあさんの一言や子供時代の記憶がよみがえり表現できたように思います。一人ではできない作業でした。音楽を聴いたり絵を観ることは大好きですが、技術や道具もないので演奏や作画に参加するのは難しいです。でも言葉は誰でも表現できる。また、かな・カタカナ・漢字のニュアンスがそれぞれ異なり日本語は面白いと思いました。◎雅子：得難い体験をさせてもらいました。ありがとうございました。

【マントルのまばたき】 p64 べちこ／めん／ふう／まっこ／ひろ (20～70代) ◎ついていけるか不安だったが、若い感性に触れて良い刺激になった。◎リレーすることで自分の詩が生きてくる。◎思いもよらない言葉が展開していき、おもしろかった。◎旧交を暖めることができうれしい。◎平安時代のような遊びで驚いた。

【リフレイン】 p66 〈チーム明け組〉 ねこ (水口栄子・女・50代) / なな (友田美江・女・40代) / Kuro (黒岩あつみ・女・50代) / Ryu (作山夕貴・女・40代) ◎ねこ：自分だけの世界になりがちな詩。連詩をすることで私自身も拡がりました。待つ時間もこんなにワクワクするなんて、あらたな発見です。みなさん、お疲れ様でした! ◎なな：初めての連詩でしたが、とても楽しかったです。一人ひとりの感性の違いが、思いがけない展開を生み、自分一人では絶対に創り出すことができないような詩ができたことを、とても誇りに思います。こんな機会を与えてくれた皆様に感謝します♡ ◎Kuro：この詩の最後のように 色をとめない線になり じゆうにのびていく 線はつながりつむぎあい みらいへつながっていく みんなの中から出てきたイメージをつむぎあう、それぞれのイメージを想像しながら次につなげる むずかしいけれど、お互いの中からどんなことばが出てくるのか楽しみでした。◎Ryu：いつものみんなからは 気づけない才能や経験が 次から次にあらわれて 互いの素晴らしいさに気づけて良かった 4日間は貴重な経験でした ありがとうございます

#### ★ゲスト参加1

チームカナヨ 別名：三島ラバーズ

三島市出身の絵本作家・スギヤマカナヨさんと、三島を第二の故郷とさせていただき、スギヤマさんに関わる編集者・出版社員・児童書ライター・学校司書さんとそのご家族のチーム (いりちゃん5歳は全参加者中最年少となった)。スギヤマさんは10年以上にわたり、三島で子どもや大人のためのワークショップを開催。今回「市民でつなげる連詩」という形のヒントをくださった。

#### ★ゲスト参加2

「インカレポエトリ」からの参加

「インカレポエトリ」とは、大学で詩の授業を受けている学生 (および卒業生) の、大学を越えた発表の場。詩集の刊行や展示会などを開催。昨秋「オンライン連詩」という興味深い試みに取り組まれていたことから、“ことばリレー”への参加をお誘いしたところ、編集人 (各大学で詩の授業を担当している教員) を含め4チームが作品を寄せてくださった。

#### ◆三島市立山田中学校1年生のチーム

国語の授業の一環として取り組まれた。1クラスにつき2チームを構成、1学年全3クラスの生徒たちが、1人1篇ずつ言葉をつなげ、6チームの作品が完成した。(指導・齊藤真子教諭)

## “ことばリレー”とは？

“ことばリレー”は、大岡信が行っていた連詩を元に、今回の企画用にことばのたね実行委員会がアレンジをしたものです。ここで、そのやり方を紹介します。

- ① 5人1グループになって、メールやラインをつかって言葉をつなげていく。
- ② 5人の中で、それぞれA、B、C、D、Eの担当を決める。あらかじめ設定されている下記の【進行表】の順番に沿ってことばをリレーしていく。
- ③ 言葉は3行か5行でまとめる。前の人が5行なら次の人は3行、その次の人は5行と、交互につらねていく。
- ④ 一人につき3回、言葉を書く担当がまわってくる。全部で16篇の詩をつなげたら終了。これは同時に共同で制作した長い詩作品。グループで相談しながらタイトルをつけて完成!

### ◆進行表◆

スタート! ① 谷川俊太郎さん(3行)→② A(5行)→③ B(3行)→④ C(5行)→⑤ D(3行)  
→⑥ E(5行)→⑦ C(3行)→⑧ B(5行)→⑨ E(3行)→⑩ D(5行)→⑪ A(3行)  
→⑫ E(5行)→⑬ B(3行)→⑭ A(5行)→⑮ D(3行)→⑯ C(5行)完成!

進行表によって、言葉を受け渡す前後の人の組み合わせは毎回変化すること、3行と5行の両方の枠組みで書く機会をもてるのが設定されています。

そして今回、リレーのトップバッターを詩人の谷川俊太郎さんが引き受けてくださいました。

1

ただどしどしいけれどまささらなこどものことば

ほほえむははのひたいにあさひがさして

うみはおだやかにふるさとあらっている

俊

言葉の調べを考えて、また子どもも連詩に参加してほしいという願いを込めてひらがな表記にしましたが、もちろんひらがなで続ける必要はありません。どんな連詩になるか楽しみですね。

谷川俊太郎

谷川さんから届いた希望に満ちた発詩を受けて、各グループは2連目からスタート。同じ発詩で始まるリレーですが、グループによって実に様々な展開が繰り広げられました。

なお、今回が初めての試みであったため、まずは参加してもらうことを優先に考えて、グループメンバーの数が5人に満たない、あるいは6人以上の場合についても、「1グループにつき1作品全16篇を制作する」を共通ルールに、変則的ではありますが、各グループ内で担当する回数や順番を適宜調整のうえ進めていただきました。

見つかると、嬉しかったです。「ことばのたね」を育てていたら素敵だなと感じます。◎の：ことばが次々とつながる中で、詩に物語が生まれていく、とてもワクワクした体験でした。ありがとうございました。◎服部静子：学生時代に、友達と手作り詩集を作って以来のため不安でしたが、皆様が、前の人の詩からイメージを広げ想いを深め、心を繋げていく様子に心を打たれ、私も日々の感動を大切にしていこうと思うようになりました。

【小さくて大きな僕の一日】 p48 日大三島高校中学校文芸部 コーヘー（好きな食べ物はビーフシチューです）／関野翼（カレーライスが好きな、高校一年生の男子です）／東雲ケイ（高校3年生の女子。気が向いたときにネットに小説あげています）／井原健登（色々やりたいことをやって日々を過ごしています）／富田百々花（年齢は15歳の中学3年生。性別は女）◎なかなか貴重な体験だった。みんなの個性がよく出ていたが、それを詩にするのはかなり難しくもやりがいを感じた。みんな難しいとはいえないんだかんだで楽しんでいたのでよかった。この経験を糧に今後も精進したい。

★【宙返りのかぞく】 p50 伊藤比呂美（詩人）／小磯洋光（翻訳家）／瀬川花乃子（早稲田大学文化構想学部四年）／廣瀬楽人（早稲田大学文化構想学部四年）／寶藏寺伽奈（早稲田大学文化構想学部四年） \*五十音順

【灯】 p52 カメ／すずまり／矢羽根／のんとみ／美和 ◎矢羽根：おはなし会の活動をしている、5人の仲間の紡ぎ出す言葉は、どれも素敵で、お互いに何かの糸で結ばれているようにどんどんバトンされ、終わってみると、すてきな作品になっていたと思います。楽しい時間をありがとうございました。◎カメ・すずまり・のんとみ・美和：一緒に活動している、メンバーの繰り出す言葉が、時に優しく、時に鋭く、思いもよらぬ方向に展開し、こうきたかと前の人の詩を読んで思いを巡らすのは楽しかった。前の人の詩を読むだけで、光景が立ち上がってきました。参加して良かった。楽しかった。と、参加したみんなことばのリレーを楽しんでくれていました。私は、俊太郎さんの3行の詩を読み、自分の母のことが思い浮かび、母が認知症である悲しさが溢れてきて、一気に書いてしまいました。このような、貴重な体験と、機会を与えていただきましてありがとうございました。（文責カメ）

【ぬくもり】 p54 〈チームfamily〉 糸（作山夕貴・女・40代）／碧（岩城麻里・女・40代）／珠（作山晴菜・女・16歳）／凧（岩城圭悟・男・13歳）◎糸：姉妹・親子・いとこの組み合わせ。こんなこと、無理やりやらないとできっこない。やれてよかった。いい記念になった。子どもたちがこんなにも成長していることに気づかされた。ありがとう。◎碧：思ってたより難しかったけど、楽しかったよ。主悟や晴菜、亮太と散歩した時の事。大好きな海の四季折々を思い出し懐かしさに浸りました。自画自賛。ほっこりあったかい。母と子どもの情景が浮かんでくる◎珠：普段、何かを表現する機会がないから、のびのび自分の言葉をつまみつけられて、楽しかった。◎凧：みんなやっておもしろかったよー。意外と楽しかったなー。

【ぬくもりのバトン】 p56 大川政代（まさよちゃん・女・53歳）／田村聡（さとちゃん・男・53歳）／足立美子（よしりん・女・53歳）／田村有希子（だばちゃん・女・48歳）／金浜順子（順さん・女・61歳）◎自分の番が来るのをドキドキして過ごし、少しずつ詩が繋がっていくのが嬉しく楽しいひとときでした。想像力を膨らませて自由に言葉遊びを楽しむ事が出来ました。気心の知れた仲間が、どんな展開も受け入れ繋いでくれる安心感があったからです。どこだかわからない終着点にみんなて手を繋ぎ進んでいくようで、とても楽しい時間でした。すてきな機会をありがとうございました。

【光の種】 p58 〈チーム絵本をたのしむ会〉 綾子（女・50代）／知恵子（女・50代）／亜子（女・50代）／お粥（女・10代）／千恵子（女・60代）／直美（女・50代）◎詩が届く度に感動していました。皆さんがあたたかく広い心で見つめている世界を知ることができたと思います！自然の

中から生まれてくるほっこりした感情や爽やかさ、大きさ。読んでいると安心するな。っていうのが私の感想です。◎ことばリレー、楽しかったです。皆さんのステキなことばが綴られその度に心が動き、流れるストーリーを感じました。身近なこと、自然、思い出をことばで表現することに、改めて新鮮な気持ちで臨めたリレーです。毎回ドキドキしながら順番を待っていましたが、皆さんと一緒に作っていく楽しさを味わえました。◎他のかたとつながることで全く違う世界を味わうことができ、楽しかったです。改めてそれぞれのかたの感性に感動いたしました。◎日常から少し離れて、心の海深くに旅をしたような時間でした。みなさんの記憶、想い、感性に触れた貴重な体験でした。コロナ禍で集えなくても、この「ことばリレー」で普段見せにくい心の交流ができてとても嬉しかったです。繋がりを感じる素敵な時間でした。◎俊太郎さんのことばからスタートしているというのもすごいと思いますが、ことばのリレーは少しずつ膨らんでいって、最後の辺りには弾けているくらいの力を持つことばへと変化するんだなあと、嬉しくもあり驚きでもありました。◎タイトルについて：完成した詩を繋げて声に出して読むと、記憶、心の風景、自然、大地へ壮大な広がり生き生きとしたことばの波が押し寄せくるような感動を覚え、タイトルを皆で考え悩み「光の種」にしました。今回、グループ皆さんとことばを繋いでいく中で10代の方が一緒に詩を作って繋げてくれたことも嬉しかったことの一つです。「光の種」はみんなそれぞれ持っている力。若い方にも私たち自身へのエールとして響きます。

◆【風景】 p60 〈チーム琢磨〉山田中学校1年2組 ◎くらげ：「朝のあたたかいおだやかな海」という設定にしました。その海でゆられているくらげの気持ちで書きました。◎ずっきーに：第2詩の「きもちがいいな」をつなぎました。日に照らされて、ペンネームにも合う「野菜」を連想しました。◎鎌吉 おしよ：日光はまぶしい、まぶしいといえばこどもの笑顔。◎ヨロシカ：第4詩の「新しい日」から、今の中学校生活の3年間について考えました。◎COO：青春なんて一瞬だということから、時間について考えました。だけど、あえて時間とは書かないようにしました。◎葡萄：第1詩の「こども」から、自分の妹が思い浮かびました。妹はまだ2歳で、最近母によく叱られます。そのたびに泣いて私の方へ来るので、抱っこします。泣き止むとケロッとして、叱られたはずの母に笑顔で話しかけます。私は怒りそうになりますが、その笑顔を見ていると、つい笑ってしまいます。◎女子力高め獅子原君：「妹の笑顔がかわいい」を入れて、リレーしました。◎みかん様：こどもを守る母は強い。◎たまご：かわいいのを見ると、ついつい買いたくなってしまったり、心をうばわれて止まってしまったりしてしまう。「かわいい」ってすごいね。◎こえだ：ねこのことを考えました。「いやし」でつなげたつもりです。◎柑橘系フルーツ：「かわいい」「いやし」などの言葉が多く入っていたので、自分は「しあわせ」を連想しました。◎真夜中：第1詩の「うみはおだやかにふるさとあっている」で、何年も何十年もあっているとと思いました。どうやってあっているのかと考えると、空を見上げると、空はふるさとを見ていると考えました。◎あや：空を見ているこどもたちをイメージしました。◎飛鳥：笑顔とはなんなのか。どういときに笑顔になるのか。その笑顔は次に何につながるのかなどを考えました。夢や憧れを思い描いたピュアなこどもたちを表現しました。◎永遠の旅人：世界中の誰もが必ず見せる「笑顔」があれば、世界中みんながずっと笑って楽しく平和に生きていきます。しかし、それは長くは続きません。誰もが苦勞をして何も見えない、どこまでつづくのかわからない長く暗いトンネルを通ることになります。しかし、トンネルを抜ければ、「すべては輝いている」ということを思い書きました。

【ふじさん わらう】 p62 〈チームゆうすい〉青木利治（沼津市）／福田淑子（三島市）／越沼正（三島市）／宇野雅子（東京都）／大倉明子（横浜市）◎利治：谷川俊太郎さんの詩から子どもの頃の故郷に思いをはせました。あの頃、きれいな水が流れていた川で子どもたちは遊んだものでした。夕方に時の鐘を聞きながら家路につくと母は夕食の支度をしていました。甘酸っぱい思い出です。その後、川の水が減ってしまいましたが、この夏60数年ぶりに三島の街に水が戻ってきたのです。源兵衛川では子どもたちが昔と変わらずに水遊びする姿に懐かしく思いました。◎明子：三島に住んでいたのは中学、高校の頃なので、小さい頃の思い出はないのです。が、柿田川の水や水藻の美しさは臉に残っております。伊豆の山々、街ののどかな様子も。リレーの中で、通学路の風景など思い

ら連詩の順番を待っていました。とても楽しい時間を皆さんと共有出来て嬉しかったです。◎詩で繋がっている間、娘が幼い頃の出来事や想いを思い出しました。とても楽しく、満たされた時間でした。

★【転がるビー玉、光を散らす】 p34 鈴木麻湖（女・21歳）／彩夏（さいか・女・21歳）／圭太郎（男・24歳）／川上雨季（女・21歳） ◎鈴木麻湖：行数の指定がある中で、イメージを進ませたり飛ばしたりするのは難しかったのですが、とても良い訓練になりました。次にどんな連が来るのか予測ができず、読むのも書くのも楽しかったです。◎彩夏：今回、連詩を初めてやってみて、自分だけの世界から離れた創作ができたと思えました。思っていた流れとは違う方向に気付いたら行っていて戸惑ったり、メンバーを気にせずあえて自己主張を試みたり、とても楽しい経験をする事ができました。◎圭太郎：恐らく、僕はこのメンバーの中ではスタイルとして異物だったと思えます。3回ある出番のうち、2回目までは自分なりの崩し方で対抗しようとしたが、3回目でまわりの雰囲気に合わせてみました。そうすることで、3回目の連はいつもの自分と違う雰囲気が出せたと思えます。成長できる体験でした。◎川上雨季：決められた順番で決められた行数を書く連詩がはじめてだったのですが、自分の語彙のいきどまりに気づく機会になりました。勉強になりました。

◆【自然と人々】 p36 〈チーム懸命〉山田中学校1年1組 ◎トマト：朝が来て、美しい太陽がおはようとあいさつしてくれるのではないかと思います。◎美音：第2詩に朝と書いてあったので、昼につなげてみました。太陽のこともつなげてみようと思いました。◎B. I. Sans：第3詩が昼のことだったので、夕方へとつなげました。みんなが帰る時間です。◎遙也：みんなが太陽を連想しているということが、わかった。◎するめ：みんなの詩から連想したら、第1詩に戻るようになった。◎シャル：海にたくさんの小さなお魚たちがおよいでいる様子を思い浮かべました。◎いちごじゃむ：朝日で輝いているところ、海が光っているのを見て感動しているところを連想しました。◎かんたろうたんこぶ：第8詩の「おさかな」ということばから、「星」を連想しました。そうしたら、きれいだなと思えました。◎さと：星から夜空を連想しました。星はきらきら光っているので、宝石を思い浮かべました。◎秋刀魚：「夜空」という言葉を見つけたので、そこから「星」を連想しました。無数の星をイルミネーションに例えました。◎リトルデーモン：「自然」ということばをつなげて、自然と自分は関係しているということに連想しました。◎ありけむ名言集：ふるさとは、商人や人々でさわがしい。朝日は赤いため、元気で笑っているみたいだということに連想しました。◎MEI：ふるさとのおだやかな様子を表しました。◎鈴田 まいな：あさからひるに場面が変わり、子どもが疲れてひるねをしたということ、連想しました。◎RORY：ものごとの裏を知っている人は、いないのではないだろうか。

【水平線のむこう】 p38 佐和（女・まとめ係）／たー（男・詩を作ったのは、小学校の時以来）／osa（女・いつもマイペースなのんびり屋）／K（男・20代・AAA Creppy nuts King gnu が好き）／美和（女・17歳・好きな食べ物は餃子です）◎佐和：詩を書いたのはすごく久しぶりでしたが、とても貴重な体験でした。前の詩から色々想像を膨らませることがとても楽しかったです。◎K：詩を作る喜びと難しさを知りました。いい経験になって楽しかったです。◎美和：家族で詩を書くなんてちょっと恥ずかしいかなと思っていましたが、普段知ることのできない文章の癖や感性を知ることができて本当に楽しかったです。詩を書くことこの楽しさと、詩にはその人の人生観が現れることを知れました。またこのような機会があったらやってみたいです。

◆【すまいる】 p40 〈チーム一笑〉山田中学校1年1組 ◎SS&SSのSZS：花も人もそれぞれよいところとわるいところがかならずあるから。◎はっば：「ことば」が印象に残ったので、いろいろな「ことば」の意味について考えました。◎夜ぎつね：人それぞれ、笑顔の感じ方は違う。ということに連想しました。◎べちか：ずっと会っていなかった子供に会い、うれしい気持ちと、大人びていて少し寂しくなった気持ちを表現しました。そして、自分の中で、何かが変わったことに気づきました。◎おおかみ：「笑顔」は、ことばをつなげやすい。◎めり：問いかけを意識しました。幸せ

がどういうことかを考えることの大切さを、問いかけました。◎Amia：幸せとは生きることだと思った。◎ぴあ：生きていて、どんなことが楽しいかなと考えました。でも、それ以上に、詩を書くことに必死でしたから、特に考えていなかったかもしれません。◎乙女1号：私は「生きること」より「死ぬこと」の方が簡単なのではないかと思います。生きていて死にたいと思うこともあると思います。でも、人は死ぬのが怖いと思っています。その辛さを強さに変えて生きていったその先に幸せがあると信じながら、私は生きています。いつかの幸せのために。第10詩から、私はこのことを思い浮かべました。◎キャタピーのメガ進化：第1詩から、とりを連想しました。小さいころの思い出が、夢にでてきたみたいなき感じです。◎黒瀬：ゆめをみている。◎べんきち：自分のふるさとに帰ってきて、夏の朝日や大好きな海を見る。すべてから「ふるさと」を感じられます。◎114514：「みつめてる」のは、怖い感じ？ そうだよ。◎第七感に目覚めた男：何を考えるかは、あなた次第です。

◆【生命】 p42 〈チーム切磋〉山田中学校1年2組 ◎昼寝ボーイ：第1詩の「まっさらなこどものことば」から、家族が明るくなることを連想した。◎車オタクの13歳：「こども」という言葉をつないで、こどものずるがしこさの裏に隠れていそうなかかわいさについて考えました。◎学級新聞発行者：「こども」から連想しました。こどもといたら、幼くて小さい。◎M. Y：第4詩から、こどもの前に進むひたむきな感じで、新しいものを求めているという感じから言葉をつなぎました。◎デズニ大好き少年：海は青くて美しいけれど、昼と夜とはまったく景色が違う。◎ばぶろびがぞ：昼には昼の良さがあり、夜には夜の良さがある。◎中島ソラミ：海はどんな気持ちのときでも美しいと感じられる場所だと思った。◎ユウ：海を外から見るとは、中に包まれている生き物たちのことを連想した。◎そこらへんの中学生：大きな海を想像して、どんなときに行くか、どんなことを思うかをじっくり考えました。◎チロル：どのように自然に色がついたか気になったので、自然を連想しました。◎てにすばーい：「いろ」を考えたときに人の感情を思いつきました。海や山は誰からも青に見えるので、みんな心が落ち着いているよということを書いて書きました。◎流れ星：第12詩を読み、「冷静」という言葉から浮かんだことをつないでみました。◎1-2 あげばん大臣：この世の中にはさまざまな音があるのに正解がなく、人に関わる音が多い。また、人の心も同じように正解がないので、この世には正解がないものってあるんだなと考えさせられました。◎犬になれたかっちゃん：「正解」について考えてみました。だれも正解を知らないということに自分に例えてみたら、「人生」という言葉が当てはまり、まだまだわからないことばかりだなと考えさせられました。◎NEW GAME：「なぞ」というフレーズをつないで、どんなことでもなぞがあるなと思えました。

【そして二人はつむがれる】 p44 日大三島高校中学校文芸部 Haru（高校一年生の元運動部）／楓（いろいろ創作するのが好き）／よしお（1人の読書も、みんなで感想を言い合うのも好きです）／朋（将来の夢は獣医です）／稲葉実歩（本と歴史が好きな中学二年生です）◎みんなでレー形式で詩を書くことは初めてだったのですが、進んでいくごとに予期せぬ展開が繰り広げられて楽しかったです。最初の方で使われていた「母」「子供」「海」「ふるさと」という言葉が後半に使われていて最初の詩がよく生かされているなと思います。達成してもう一つのグループと読み比べてみて大きく違いが出たことに驚きました。結局最後まで書いてみて、詩を作る大変さがことごとくわかり、読んでの方が楽だなと思います。

【たからさがし】 p46 小西政司（男・76歳）／小澤高好（男・70歳）／サン（女・30代）／のの（女・30代）／おすみ（女・60歳）・服部静子（女）◎小西政司：連詩とはイメージの「しりとり」のような座の文学と早合点して初体験の詩作の「ことばリレー」に参加。その際、尊敬する先人のオマージュを試みました。小出正吾、ムーアハウス、大岡信。みな、言葉や文字の探求者でした。◎サン：詩を使つてのコミュニケーションは初めての体験でした。他のメンバーから送られてくる（贈られてくる）ことばを毎回楽しみにしておりました。そして、自分の番になったとき、楽しむ、というよりは、ことば探しに疲れてしまう…というのが本当のところでしたが…、もしかしてこれかな？ということばが

詩行のイメージから、どのくらい離れてもいいものか、その距離を掴むことが難しかったです。でも、自分一人ではこの方向には行かない!という方向に詩がころがるのが面白くて、たのしんで書き進めることができました。◎奥山紗英：3行だけでどう前の連を受け取って次に回していくかがとても難しかったです。順当に次の人に渡すかそれとも流れを変えてしまうか自分の番が回ってくるたびに大に悩みました。その一方で、自分の書いた連から言葉を拾ってくれて続けてもらえることに小さな喜びを感じました。連詩がどういう方向に進んでいくのか書いている最中ずっとワクワクしていました。◎今野美怜：他の方にことばを繋ぐことに難しさを感じ、緊張していましたが、それ以上に皆で詩をつくる楽しさがありました。自分一人では思いつかないような、色々なことばに触れることができて、とても嬉しく思っています。◎石田美月：五行ばかりでとても荷が重かったです(笑)なるべく遠くの世界に行くように言葉を紡ごうと思いましたが、自分の世界が狭くて苦戦しました。でも、班の人の言葉からも発想を貰えることが多くとても楽しい経験となりました!

◆【笑顔の世界～心について考えよう～】 p22 〈チームNext〉 山田中学校1年3組 ◎ツキ：「あさひ」という言葉から連想しました。毎日朝が来て、窓からのぞくと、必ずきれいに光り輝いている太陽を見て「私もがんばらなくちゃ」と思うので、希望を持てる詩にしました。◎はな：笑っている人がたくさんいると笑顔の輪が広がっていくのではないかと思います。◎ベル：さらに笑顔が増えるように明るい雰囲気になりました。笑い声の絶えない楽しい様子を連想しました。◎ヤマポン：これは架空の物語です。だけど、僕はこの詩がだいすきです。◎なし：挑戦しないと、やっぱり損だと思う。◎suzu：ここまでつながってきた「ことば」「あさひ」「うみ」から、「はなし」「あたたかさ」「こころのひろさ」を連想しました。私もたくさんのお話を、朝日のようなあたたかさ、海のような心の広さで聞きたいと思いました。◎毛のはえた卵：心というのは、優しい心、悲しい心などがあるので、よくわからなくなる。心という疑問。◎ころばしやz：「ことば」ということについて考えました。◎エジソン：第9詩が「言葉って何だろう」で終わっていたので、僕が思う言葉の役割について書いてみました。僕は言葉は思いを伝えるものだと思います。日常生活でも、言葉を通じて思いを伝え、生きているのだと思うからです。◎時雨：自分がいつもどんなことを思って、言葉を発しているのかについて考え、つなげました。◎みんなのアイドル♡：「海」と「おだやか」という言葉から、地元海である駿河湾を連想しました。今、見えている海はおだやかだけど、世界の海はどんな大変なことになっているのだろうと思います。◎白ねこ：これまでの言葉をつないで詩を続けるのが難しい。◎海湯：第13詩でアメリカやイギリスと書かれているので、「世界」という言葉をつないでみました。みんなの心が世界を救い、ときには悪いことも起きます。それらすべて、わたしたちで決まるだろうと思ひ、この先、いろいろな世界が広がり、楽しみだという気持ちを含めました。◎BrownKun：温かい心を持っている人がいるということは、もちろん冷たい心を持っている人もいるということも連想しました。冷たい心だけを持った人だけがいる世界とは、いったいどんな風になってしまうのかを疑問として、次の人に「ことば」をつなげました。◎ゴールデンカムイ：アイデアが次から次へと浮かんで来て、楽しかったです。

★【おとなから子どもへ 子どもからおとなへ】 p24 スギヤマカナヨ／ハル／ソラ／健太郎／ふじの／かおり／あおい／麻央／志津／新／いり／いつか／まさこ／ゆきこ／おすみ ◎スギヤマカナヨ：大切な仲間や子どもたちとも詩を作る機会に恵まれ、それを楽しむ子どもたちの普段と違う一面を見たり、たくさんのお言葉に感謝です。ディスタンスを求められる日々だからこそ、ことばを大事に寄り添わせていきたいと思ひます。◎健太郎：家族で詩を作る機会は、これまでなかったのではなかっただけです。他の人の詩に続ける連詩ははじめての体験でした。大人は「詩」らしくしようと書いては消し書いては消し頭をひねって苦心していましたが子どもはすらすらとしゃべるようにことばを紙に書いていてそのギャップが面白かったです。◎麻央：どんな言葉がやってくるのか、自分の言葉はどう繋がっていくのか。ドキドキとワクワクの年末でした。作品は、子どもや仲間との時間や関係を言葉で閉じ込めたようで、宝物になりました。◎志津：久しぶりに詩を書きました。連詩という形式が新鮮で、みんなでことばを紡いでいく感じが楽しかったです。◎いつか：いま、じぶんや

子どものいる位置を知ることができて面白かったです!◎まさこ：いつものように、いつものみんなと会えないなか、あたたかい繋がりや友情にあためて気づかせてもらいました。楽しい企画をありがとうございました!◎ゆきこ：イベントができなくなったのは残念ですが、こうして新しい形になることもまた、素敵なことがありますよね。ことばって自由だなと思います!

【カーテンをあける】 p26 〈チームねこペンギンの鱗〉 竹(たけろう・7歳・小2)／マ(マキ・39歳)／こ(こえだ・13歳・中1)／か(かおる・50歳)／だ(だいじろう・44歳) ◎2組の親子+1人の大人のチームです。過去と未来の長さの違いが年齢差に現れているのではないかと思います。

【かさね、かさねていく】 p28 すぎまき／童／早／すわまきこ／ゆみこば ◎すぎまき：ことばを繋いでいくワクワク感、楽しさがありました。バトンを渡されて考えていく過程が、日常生活にプラスして楽しい宿題というか、いつもと違う頭を使ったような気がして、とても心地よかったです。◎童：自分が日常生活を送っている中に、ラインで他の人のことばの別世界がぼんっと入り込んでくる感覚が不思議で新鮮な体験だった。◎早：詩を作るなど何十年ぶりで不安もあったのですが、いつも使わない頭を使いことばと向き合うのは楽しい経験でした。自分のことばから思いがけない世界が広がっていき、ワクワクした日々でした。このような機会をくださってありがとうございました。◎すわまきこ：「ことばリレー」に誘っていただき、ありがとうございました。連詩は全く知らなかったのですが、ことばのバトンを自分なりに受け取って自分のことばを紡ぎ出し繋いでゆくのはとても楽しくスリリングで新鮮な体験でした。出来上がったものを見て、自分だけでは絶対に作れないカラフルで豊かな世界が現れていて、連詩って面白いなあ、と思いました。◎ゆみこば：初めての連詩、最初は尻込みしていたけれど繋がって出来上がっていく詩が楽しみで、終わってしまうのが寂しく思いました。たくさんある言葉の中で3行5行に込められた言葉たちはみんな素敵で、毎回にんまりと微笑む私でした。

◆【変わりゆく世界】 p30 〈チームStage〉 山田中学校1年3組 ◎時雨 いつも心は虹色に：うみのきもちがわかるのは、あらってもらっているふるさとしかないのでは…と考えました。◎ナマケモノ：ふるさととみんなのことを、やさしく守ってくれて、みんなにとって居心地のいい、大好きな場所かなと思いました。◎夜月美麗：ふるさととはだれでも一つは持っている、生まれたときにあたえられる生涯失われることのない、かけがえのない大切な場所だと思いました。◎秋：みんなの詩を読んでいてたどたどしかったことが成長し、母になったりするものもふるさとだということ、ふるさととは一つしかないかけがえのないものなのだと。そんなふるさとが、今もまわっている。◎みな：あさひを見たことも、いやなことであっても、それを忘れてしまうくらい、やさしい力強いあさひに感動する。◎ヴァーディア：あさひが沈むことについても、考えてみよう。だんだんと自然の声も聞こえてくるのかな。◎餌怒革乱歩：一日の終わりを連想しました。◎ONCE：自然の美しさは、人を元気づけられる。◎時雨 世界：第1詩の「たどたどしいまさらなこどものことば」から伝えたいけど伝わらないイマジナリーな世界を連想しました。そして、子供のイマジナリーな世界を理解できたたった二人の人物 父親と母親を思い、言葉をつなぎました。◎さくらんぼ：人が想像して、それを感じることは、それぞれに違うと思った。こどもが考える自由な想像を連想した。◎リーベン：動物と人との違い、人の人生の先、それがどのようにしているか疑問に思い、その思いを詩に込めました。◎春を告げる：僕は人生のことについて考えました。人生とは、人の生きる世界だということに気づきました。人生は大事です。◎こゆんぬ：人間の生きている価値や世界の広さを伝えたいと思った。◎結実：世界から、季節を連想しました。ことばをつなげるのがむずかしい。

【ことのはのねいろ】 p32 〈チームかけはし〉 くさ(女)／わた(女)／かぜ(女)／よし(女)／すず(女) ◎みんなで作り上げた作品が愛おしい。絵本にしたいです。◎はじめての体験でした。脳の普段は使わない部分を働かせた感じ。◎みんなで一つの作品を作る行為がとても楽しく、次の人はどんな言葉を紡いでくれるのか、待っている時間も楽しかったです。◎ドキドキ、ワクワクしながら

【作品タイトル】 掲載ページ 〈チーム名〉 参加者プロフィール ◎コメント

★【あたらしいなまえ】 p6 平岡花(22歳)／川向いまり(20歳)／瀬利渚(24歳)／木村かのん(22歳) ◎木村かのん：谷川俊太郎さんにもグループのメンバーにも直接お会いできませんでしたが、前のことばを紡いだ方が、どんな景色を思い描いていたのかじっくり考え、自分の中でその視界をさらに展開させようとする過程で、離れているメンバーとも、ことばによって繋がりが広がってゆく風景を共有できる感覚がありました。なんとなく気温や匂い、明るさまで感じられて、詩の中では季節も場所も軽やかに飛び越えてゆけるのが気持ち良かったです。完成後に全員で音読してみ、お互いのことばを尊重していることが伝わってきました。偶然知り合ったメンバーと一つのを完成させられた喜びを実感しました。

【ありうべき旅】 p8 ひと／玲(男・43歳)／童／ピメリコ(女・45歳)／Sampo(女・50歳) ◎童：身体の中に刻まれた感覚をもってしか言葉にはならないことを実感。完成後のフィードバック会もふくめ豊かで楽しい時間でした。◎ピメリコ：私は趣味で俳句を作ることがありますが、ことばリレーでは俳句とは全く違う言葉の見つけ方、組み合わせ方を試すことが出来てとても楽しかったです。◎Sampo：わたしは言葉が思い浮かぶのか?!と心配でしたが皆さんの言葉を見ていたら、頭の中は妄想劇場になり出番を待ちきれないで、突っ走る言葉たちの指揮を取れぬまま楽しんでおりました。

【あるくことば】 p10 こうじ(男・40代)／ゆうこ(女・30代)／ふみえ(女・7歳)／孔一(男・40代)／N(女・50代) ◎こうじ・ゆうこ・ふみえ：小学校一年生の娘に言葉の持つ豊かさを感じて貰いたい為に家族で参加させて頂きました。顔を合わせた事のない方々と一緒に詩を繋いでゆくことは初めての体験です。子供が加わる事で拙い表現になってしまったかも知れませんが私たちは楽しく参加させて頂きました。期間中は詩の中に暮らしているような、なんとも味わい深い一ヶ月間でしたね。◎孔一：楽しかったです。前の人が使った言葉と同じ言葉を使うべきか、あえて使わぬべきか、関連するけど違う言葉を使うべきか、が悩むところでした。思わぬ方向に進んでいくのは愉快でした。また参加者それぞれの視点の違いも面白かったです。◎N：「ことばのリレー」に参加し、知り合いでない方と詩をつなげるという初めての体験ができて楽しかったです。どんな風にならなければならないのかとワクワクした気持ちで過ごした期間でした。ありがとうございました。

【いちばんほし】 p12 〈チーム高校生(三島おやこ劇場)〉 なっちゃんあああん(大石夏美・女・16歳)／のこ(作山晴菜・女・16歳)／ちはを(神戸千晴・女・16歳)／PN.かず(鈴木一希・男・16歳)／T(蔭山朱鷺・男・18歳) ◎かずき(PN.かず)：色々なことを考えれてよかった。かずを。◎せいな(のこ)：多才な仲間にも困られた苦悩。せいを。◎とき(T)：ノスタルジックな気分浸れて楽しかった。ときを。◎なつみ(なっちゃんあああん)：みんなの個性がでてるなと思った。なつを。◎ちはる(ちはを)：じんせいをまんきつしたいおとしごろ。ちはを。

【一陽来復】 p14 間宮緑／浅田みつ子／青木ほなみ／渡邊美恵子／奈良本真紀 ◎間宮緑：参加した皆さんそれぞれが心に秘めた感性を言葉にしているような、なにか秘密をのぞくような楽しさがありました。僕もリレーを通じて自分の言葉を探しながら、自分自身も気づけなかったような感覚が表に出てきて、不思議な体験をしました。◎浅田みつ子：人類で唯一生存している我々ホモサピエンスが生きのびられたのは言葉のおかげだという。今回、その言葉をリレーするという初の経験をした。一つの言葉が、リレーされ続くとリレー者の豊かな感性と文章力で、膨らみ、編み続けられていくのを読み味わいながら、驚き感動した。遥かな古代人からリレーされてきた素晴らしいコミュニケーション力である言葉を、大切に次代へとリレーしていかなくてはと思うのである。◎青木ほなみ：連詩という、ことばリレーに初めて参加させて頂きました。いつもあらゆる場面で、一番になったことが無い私が、谷川俊太郎さんの、こと

ばをかみしめるうちに、続くはじめの一步に立候補していました。名詞 動詞 形容詞、想いに浮かんだことばを、一緒くたにして、好きなフレーズをピックアップ、変なもの同士を引っ付けたり、離したり、感覚がことばになるように、重ねていきました。グループの人のことばに目が覚める思いがしたり、続くことばを産み出すことにウキウキしました。その内に自分の心の中にひそんでいた感情が解き放たれるような気がしました。ことばのリレーに参加して良かった。最後に引用させて頂いた、ことばの中に、岩場に作ったクライミングするためのルート名が点在していることを、お伝えします。◎渡邊美恵子：谷川俊太郎さんのはじめの言葉が身近に感じられ、どんな風に育ってゆくのか、とても興味がありました。例え同じメンバー内でも、順番が変われば世界も変わる。更には、バトンを受け取るタイミングによって自分の思考も変化する。仮に今一度同じテーマに取り組んだら、今度は全く別の作品が生まれることでしょうか。五人五様のイメージの世界は無限度であり、まるで一期一会のことば遊び。近付くベクトルにときめいたり、自分では思いつかない発想にワクワクしたりと、とても楽しいリアルタイムでした。この度は、素敵な企画に参加させていただきありがとうございました。◎奈良本真紀：どこまでも続けていけそうな感覚はまさに遊びでした。

【彩りシンフォニー】 p16 〈チーム えほんやさん〉 福江寛子(女・40代)／鈴木保子(女・50代)／鈴木磨里(女・40代)／渡辺若菜(女・50代)／梅原綾子(女・40代)／鈴木真理(女・50代)／山内知恵子(女・50代) ◎こんにゃく劇場というグループで読み聞かせをやっています。今回、何十年か振りに言葉について考えました。何気なく使っている言葉も繋げる言葉によって想像が膨らんだり、繋げる言葉を探す作業もたのしかったです。自分では思いつかない言葉達も沢山うまれ聞くことができ楽しかったです。◎この町に越して来て約一年。まだまだ知り合いの多くない私は、今回の『ことばリレー』のお仲間に入れていただき、他のメンバーさんと、今までよりも心が近くなったような気がしました。その方が紡ぎ出す言葉からは、その人そのものが感じられるようでした。また、自分の心の内側にあるものを知れるとても良い機会でもありました。ちょっと緊張しましたが、とてもワクワクして温かな時間でした。素敵な企画をありがとうございました。◎読み聞かせボランティアの仲間と一緒に、ことばリレーが出来るととても温かい気持ちになれました。みえないけれど繋いでくれる糸が出来たようでした。◎絵本の読み聞かせで一緒にさせて頂いている皆さんとの参加でしたので、楽しみ半分で恐縮しておりました。スタートすると、詩が次々あがってきて、さすが言葉に慣れ親しんでいる方達!と感銘を受けました。浅学非才な私が、なんとか詩を作る事ができたのも、皆さんの優しさが伝わってきたからだと思います。良い機会を頂き、有難う御座ります。◎この企画に参加したからこそ見えた景色、感じた風、光、香り、色など、とても新鮮でした。ことば探しも楽しかったです。普段一緒にいる皆さんと、このような形が繋がれたことも嬉しく、皆さんの作ることば一語一語に感心しながらお一人お一人のお顔が思い浮かびました。ステキな企画をありがとうございました。

【生まれ落ちる】 p18 間宮緑／磯部多嘉子／蓬生裕晃／藤澤る一／下村大和 ◎間宮緑：普段の会話では使わない言葉でコミュニケーションをしている感じがして、皆さんの世界の感じ方がちょっとわかって楽しかったです。◎磯部多嘉子：皆さんが表現しようとしている世界、言葉の選び方が全て違って、そこに個性を感じて面白かったです。前の人の言葉を受けて、短い言葉の中で表現しようとするのはとても難しく、だけど刺激的でした。◎蓬生裕晃：前の人のイメージを引き継ぎつつ、展開を作っていくのが難しかったです。一人では思いつかないような言葉の飛躍が楽しめました。◎藤澤る一：明暗バラバラのパラレルワールドがぐるっとまわっておさまった、胎内回帰の不思議な世界でした。知らない方ばかりでしたが短い言葉からキャラが垣間見えました。◎下村大和：「連詩」はいつも見る・聞く専門だったのですが、今回作る側にまわり楽しかったです。言葉に対しての意識は根底にありつつも、自分とは違った感性に触れ、引き継ぎ、豊かな時間を過ごすことができました。良いメンバーと連詩を作れて嬉しく思います。

★【海から街へ】 p20 長谷川美緒(女・35歳)／奥山紗英(女・21歳)／今野美怜(女・20歳)／石田美月(女・21歳) ◎長谷川美緒：初めの3行のイメージから、また直前の人が書いた

## 編集後記

人はみな、誰しも「ことば」をもっています。中でも言葉を書くことは、最も手近にできることのひとつ。情報をやりとりする手段としての言葉から離れて、自分と他者との心をつなぐことができる言葉について、あらためて考えることができました。こんなにも豊かなコミュニケーションをもたらしてくれる言葉を、私たちはもつことができている、そのことに対する喜びをかみしめています。

ことばのたね実行委員会は、2017年11月の大岡信ことば館の閉館を受けて、同館がこれまで発信してきた詩人・大岡信の精神やことばの魅力、三島の地にまかれた種としてとらえ、その種が、同館の閉館とともに消えてしまうのではなく、これからも育ち、やがて芽吹いていくことを願って発足しました。メンバーは元大岡信ことば館学芸員、三島市の学校司書や家庭文庫の運営者。三島の水によってその感性が育まれたといってもいい、三島生まれの大岡信の作品や存在を、身近に感じられるよう大人や子どもたちに伝えていく活動を行っています。

## 第2回 大岡信さん お誕生月の催し「つなげるし⇔つながるし」 ことばリレー記録集

編集：ことばのたね実行委員会

発行日：2021年2月23日

発行：三島市産業文化部 文化振興課

〒411-8666 静岡県三島市北田町4-47

TEL: 055-983-2756

e-mail: bunka@city.mishima.shizuoka.jp

印刷協力：株式会社三島印刷



